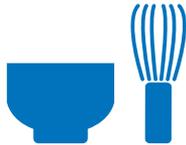


令和6年度 第45回
学校茶道エッセイ集



多くの力作から選考された「エッセイ集」です。
日本の伝統文化の素晴らしさ、
四季の美しさを見つけ出す様子や、
もてなしとは何かを考え、
慈しみ感謝するすがたが、
素直な言葉で綴られています。
どうぞ、みなさまでお読みください。

はじめに

日頃より学校茶道の推進にご理解とご協力をいただき、有り難うございます。

この「学校茶道エッセイ」事業は、茶道を学ぶ学生・生徒の皆さんに学校や地域における茶道活動のエピソードや体験談、感想や意見を自由に綴ってもらうものです。

本年は、大学生・高等専門学校生・各種専門学校生を対象とした「学生の部」に121点、高校生・中学生を対象とした「生徒の部」に1,427点の応募がありました。

淡交会総本部での一次選考の後、選考委員5名による選考委員会を経て、「学生の部」に優秀賞3点、第一席5点、佳作12点と、「生徒の部」に優秀賞10点、第一席20点、佳作30点、更には、本事業に積極的にお取り組みいただいた学校の中から学校賞として3校を選出いたしました。

茶道指導者や顧問の先生方からは、茶道活動の時間が十分に確保できないなか、このエッセイが子どもたちの思いや気付き、成長を知る大切な機会になっているとの声が聞かれます。

本事業が学生・生徒の皆さんにとって自身と茶道との関りを見つめ直すきっかけとなるとともに、教員の働き方改革や部活動の地域展開が進められるなど変化する教育現場において学校茶道がさらに活かされていくことを願っております。

最後になりましたが、「学校茶道エッセイ」事業に対する関係各位のご支援とご協力並びに指導者の皆様の日々のご努力に感謝を申し上げ、ここにエッセイ集を刊行いたします。

令和7年2月

一般社団法人 茶道裏千家淡交会総本部

追記

「学生の部」、「生徒の部」ともに優秀賞・第一席は、指導者の所属する学校茶道連絡協議会順に掲載しています。

また、裏千家ホームページ (<https://www.urasenke.or.jp/>) にて、この冊子に掲載されている作品をご覧いただけますので、学生・生徒の皆さんにご案内いただければ幸甚です。

目次

学生の部

※指導者の所属する学校茶道連絡協議会順に掲載しています。
()は学校所在地

優 秀 賞

心で読む	北海道教育大学釧路校4年(北海道)	鳴海あゆ子	1
茶道を通じて得たもの	上智大学1年(東京都)	市野凜太郎	2
作法が形作る心地よさ	防衛医科大学校3年(埼玉県)	吉田ひかり	3

第 一 席

未知の世界	防衛医科大学校3年(埼玉県)	松浦海生	5
茶道の世界での出会いとつながり	筑波大学3年(茨城県)	御山真帆	6
茶会を創る	横浜国立大学3年(神奈川県)	杉山万璃亜	7
離れて見つめる真の魅力	就実大学4年(岡山県)	中野公瑛	8
なぜ茶道に惚れたのか?	広東外語外貿大学2年(中華人民共和国)	楊 睿	10

生徒の部

優 秀 賞

茶道の未来	酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校2年（北海道）	阿部日菜花 13
茶の湯に学ぶ感謝の心	UWC ISAK Japan 3年（長野県）	林 美希 14
歩々是道場	渋谷教育学園幕張高等学校2年（千葉県）	井上 紗良 15
「私」のお点前	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校3年（神奈川県）	小澤由莉音 17
人とのつながり	山梨県立甲府第一高等学校3年（山梨県）	野中未来 18
つらぬき留む	鶴見大学附属高等学校3年（神奈川県）	西村奈波 19
道の始まり	西尾市立鶴城中学校1年（愛知県）	飯伏花帆 20
留学で学んだこと	長崎大学教育学部附属中学校3年（長崎県）	川口 紗季 21
コーヒーポットとスープ皿	沖縄県立首里高等学校2年（沖縄県）	菊川乙音 22
「こころ」のコミュニケーション	沖縄県立普天間高等学校3年（沖縄県）	新城星奈 24

第 一 席

若鮎が教えてくれたこと	國學院大學久我山高등학교2年（東京都）	三浦理紗 26
先人に学び、そして。	横浜市立東高等学校2年（神奈川県）	鉢呂朋佳 27
茶道を広める為に私が出来ること	下北沢成徳高等学校2年（東京都）	平野瑞香 28
後輩から先輩へ、先輩から後輩へ	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校2年（神奈川県）	五郎丸紗衣 29
茶道と私の3年間	巣鴨学園中学校3年（東京都）	大橋優樹 30
茶道の“会話”	昌平高等学校2年（埼玉県）	高野栞凧 31
基礎を積み重ねたその先で	鶴見大学附属高等学校1年（神奈川県）	西尾昞翔 32
平和のとりで	湘南学園高等学校3年（神奈川県）	多田奈緒美 33
茶道を通して成長！	愛知県立猿投農林高等学校3年（愛知県）	森下初香 34
茶道がつなぐ人と人との出会い	愛知県立半田東高等学校2年（愛知県）	檜垣翠花 35
一生の趣味	富山県立魚津高等学校3年（富山県）	長谷野ゆい 36
「ことば」で繋がる茶道部	滋賀県立石山高等学校2年（滋賀県）	橋 柿 遥 37

「お茶席」をつくり上げるとのこと	兵庫県立御影高等学校2年（兵庫県）	平田美郁 38
茶道が私に教えてくれた、グローバルな和の精神	近畿大学附属高等学校2年（大阪府）	須田悠加 39
海の向こうまで届け	兵庫県立国際高等学校2年（兵庫県）	神谷あかり 40
まあるく生きる	賢明女子学院中学校3年（兵庫県）	阿部花音 41
開いた世界	姫路市立神南中学校2年（兵庫県）	苗村かの 42
茶を纏う蟬	兵庫県立龍野高等学校2年（兵庫県）	安井千晴 43
あの日不登校だった僕が見た茶道は	福岡県立嘉穂高等学校2年（福岡県）	末武快斗 44
力を合わせる大切さ	飯塚市立飯塚第一中学校2年（福岡県）	小堺八愛 45

学校賞

滋賀県立石山高等学校（滋賀県）
 國學院大學久我山中学校（東京都）
 伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校（群馬県）

淡交会総本部にて一次選考の上、選考委員会にて選考しました。

〈選考委員〉伊崎 一夫氏 関西福祉大学教育学部大学院研究科客員教授
 石塚 修氏 筑波大学人文社会系教授
 筒井 紘一氏 茶道資料館顧問
 波佐間 清氏 元下関市教育委員会教育長
 吉田 幸一氏 前プール学院理事長兼中学校・高等学校長

心で読む

北海道教育大学釧路校4年（北海道）

鳴海 あゆ子

私は、大学の部活動で茶道を始めて4年になります。そして今年、教員採用試験を受験しました。今は、その結果を待っています。私の人生における、一世一代の勝負だ、という思いで臨んできました。将来は、教師という仕事を通して茶道を子ども達に伝えていく存在になりたいと、強く思っています。ここには、今の私が茶道を通して学び、子ども達に伝えていかなければならないと思っていることについて綴ります。

私は、大学4年間を通して、教師になるため多くのことを学びました。その中で、今の子ども達が生きるこれからの時代は、「予測困難な時代」と呼ばれていることを知りました。これからは、答えの無い問いが社会にどんどん溢れかえります。既存の価値観や知識だけでは太刀打ちできません。ここで重要視されているのは「考える力」です。答えの無い問いに対し、他者と協働して新しく「考えて」いくことが必須なのです。だからこそ、子ども達を「考える力」のある大人に育てなければならない。そう強く決意し、精進していこうと思っています。

しかし、ここではあえて、一見この決意に逆行するような考えを挙げたいと思います。それは「頭で考える」のではなく「心で読む」ことの大切さです。ありとあらゆる物事を、あえて頭では考えず「心で読む力」もまた、これからの時代において決して欠かすことができない「生きる力」なのです。「頭で考える」ことが重要視されるあまり「心で読む」ことは現代、薄れかけているようにも思います。

私にこのことを教えてくれたのは、紛れもなく茶道です。茶道は「頭で考える」のではなく、まさに「心で読む」ことを最も重んじる文化だと思います。お点前についても、頭で考えず、手が勝手に動くようになったら一人前。さらに、同時に心で様々なことを読めるようになったら一流なのだと思います。お点前をしながらも、その音や空気を一心に味わい、お客様の様子をうかがって、そこに心を配れるような茶人に、私もなりたいです。また、客という立場においても、お軸やお花、お菓子やお茶の味など、お茶室の全てに込められた亭主の想いを、「頭で考えて」受け取るのではなく「心で読んで」有難く受け取っていきたいです。

茶道を通し「心で読む」ことの大切さを一番実感したのは、お軸についてです。私の一番好きなお軸には「一期一会」と書いてあります。このお軸を「頭で考えて」受け取ると「一生に一度の出会いを大切に」という辞書的な意味が浮かびます。そして、それを基に、このお稽古に誠意を尽くそう、と気を引き締めます。しかし、このお軸を「心で読もう」と努めると、さらにもう一步踏み込んだ解釈ができます。具体的には、今まで部員と過ごしたお茶室での思い出が走馬灯のように浮かび上がるのです。そして、その奇跡に心が揺れます。みんな、出身地



の違う、就職の地もおそらく異なる仲間たち。そんな私たちが今ここに集っている、という奇跡です。そして、そんな仲間たちと些細なことで笑い合いながら、かけがえのない思い出を作ることができた4年間の有難みが、心にじんわりと染みわたります。そして、思い出は抱きしめながら、一分一秒、今この時を大切に生きなければと、強く心に誓うのです。人間は「頭で考える」のではなく「心で読んだ」ときに初めて、自分にとって本当に大切なことに気付けるのだと思います。茶道は「心で読む」ことの大切さを人々に伝え続ける、今も昔も変わらない非常に教育的効果の高い日本文化だと確信しています。

今の私にとってお稽古の時間は心を温かくする、人生に欠かせないものになりました。そして、これからは茶道から教えてもらった「心で読む」ことの大切さを、子ども達に伝えていける教師になろうと心に決めています。

優秀賞

茶道を通じて得たもの

上智大学1年（東京都）

市野 凜太郎

私が、今年で7年目を迎える茶道とのお付き合いの中で、茶道から学んだものや得たものは数多くあるが、本稿では、その中でも特に私の生き方に最も影響を与えてくれた、「一期一会」の精神について振り返りたいと思う。

私自身の茶道との出会いは、今から6年前にさかのぼる。小学校を卒業し、12年間過ごした故郷を離れ、中高一貫校に入学し、学生寮での生活を始めた。もともと運動が好きではなかった私は、文化部を中心に、数多くの部活を見学した。その中で、指導者の先生のお話や先輩の美しい所作に触れ、茶道部への入部を決めた。そこから新型コロナ禍を挟みつつも、高等部の部活を高2の終わりに卒部するまで約5年間、高校の部活動で毎週1回のお稽古に励んだ。今春、大学に入学し、所属する部活動・サークルを探すことになった。大学に入ったら茶道を再び始める、と決めていたわけではなかったが自然に茶道部に足が向いていた。2年ぶりに茶道を再開することとなり、現在は毎週2回、お稽古に励んでいる。

私が最初に「一期一会」の精神を強く感じたのは、在学していた学校で卒部される先輩を見送ったことだった。中高の部活というある意味で閉鎖的なコミュニティであったが、毎週1回、集ってお稽古に励んでいた仲間、そして、茶道を始めるきっかけにもなった先輩の卒部を見送ることは悲しさや寂しさ、喪失感などといった感情もあったものの、その時に強く感じたのが、「常にこれが最後だと考え誠意を尽くす」という、まさに「一期一会」の考え方であった。卒部された先輩がいらっしゃれば、すぐに後輩が入ってくる。中高の部活と言えど、同じ顔触れでお稽古ができるのは1年限り。1回1回のお稽古の重みや重要性というものを感じるとともに、1年に1度のお茶会への向き合い方も再考するきっかけとなった。このメンバーでお客様をおもてなしできるのは1度だけである、ということを改めて理解することでより、一席一席に思



いを込め、最高のおもてなしをしよう、と考えるに至った。

次にこの精神を強く認識したのは、新型コロナ禍の到来だった。3か月間にわたる臨時休校と、それに続く分散登校。あわせると約半年間、茶道のお稽古から強制的に離されていた。また、部活動が再開した後も、当面の間は割稽古のみでお茶を点てることはなかった。ようやく解禁されたのちも、しばらくはご自服、ということになり、他者へのおもてなしどころではなくなった。マスクをして一方向で「ことば」の暗唱もするようになったが「一碗を手にはしては多くの恩愛に感謝をささげ、お互いに人々によって生かされていることを知る茶道のよさを皆に伝えるよう努力しましょう」という部分を読み上げるたびに、他者にお茶を点ててお出しすることすらできない状況下でどうすれば良いのだろうか、と複雑な思いを抱いたりもした。新型コロナ禍においてはその後も一進一退が続き、通常のお稽古ができるようになるまでには約2年の月日が経過をしていた。当時は、お菓子もお茶もないお稽古に不満を感じ、やるせない感情を抱いていたが、今思い返せば、茶道との向き合い方、さらには「一期一会」の精神を見つめ直すという意味では良い経験だったのではないかと自分の中で昇華できている。

私は、これら2つの経験を通して、その時茶室に集った顔ぶれは、二度とないまさに「一期一会」の出会いであること、さらに、いつおもてなしができなくなるかわからないという思いから常にできるだけ誠意を尽くす、という「一期一会」の精神を体得した。

また、「一期一会」の考え方は、新型コロナ禍を経て私の人生観にもつながっており、人との別れの際は、もう二度と会えないかもしれないと思い、常にきれいに別れられるよう努めるようになった。

これ以外にも、茶道はお点前の作法だけでなく、多くのものを私に与えてくれている。もちろん、美しい所作を身に着けることも大事であるが、今後も「一期一会」の精神を忘れず、お稽古に励みたい。

優秀賞

作法が形作る心地よさ

防衛医科大学校3年（埼玉県）

吉田 ひかり

自由とは制約のないことだと考えていた。教育の名の下で行動が制限されることの多い青年期。私はルールのあるスポーツ、集団競技が苦手だった。特別にやりたいスポーツなども無かった私は大学に入学して、部活勧誘が始まるとすぐに尻込みしてしまった。楽なほうに流されて面倒なことは避けていく。そして、いくつもの出会いの機会を失ってきたのだろう。茶道は形式的で難しく、自分とは縁のないものとして敬遠していた。茶道に触れるきっかけとなったのは1年の秋の学園祭で親しい友人が亭主を務めていた茶会だった。この友人がいなかったら一人では入ろうとはしなかっただろう。想像していた堅苦しいイメージとは違い、程よい緊張感とお茶を楽しむための空間が心地よかった。それで同級生よりも1年程遅れたが、茶道部



に入部することにした。その後、他大学の茶会などに行き、同じお点前なのに人によって大きな違いがある面白さを知った。自分もお客様をもてなす側になりたいと思い、稽古を続けた。

入部して最初に気づいたのは作法と点前手順を覚えることの大変さであった。茶会で他人のお点前を見る時には簡単そうに見えるが、繊細な一つ一つの動作を自分でするのは難しい。「重いものは軽そうに、軽いものは重そうに」扱うことに普段とは違う緊張感を感じた。作法が互いへの敬意を表すためのものであることも稽古の中で気づいた。私は今まで自分しか見えていなかったのだ。つまり、茶室で感じた心地よさの正体は、互いへの思いやりであった。更に後で知ったのは、この思いやりの心地よさは「和敬清寂」の「和」と「敬」に相当するということだ。

初対面の人とでも無条件に共有することのできる居心地の良さ。茶道には凡人の入り難い敷居の高さがあると想像していたが、実は誰にでも開かれていた。作法があることで相手を思いやる「場」が形成され、その中で作法に則った振る舞いがなされる。作法があるおかげで互いに相手を思いやる、心地の良い空間が形成されることに気づいた。

茶道によって今まで気付くことのなかった季節感や道具を扱う所作の無駄のない美しさなども知ることができた。お軸、茶花、お菓子によって体で感じる四季の移ろい。お床の花入れに飾られた茶花を路傍に見つけた時の感動。お点前の中でなされるように道具を丁寧に扱えば、日常生活の中の所作もきつともっと生き生きとするだろう。私が生活する日常も自分の見次第で変わるということに気づくことができた。

茶道の作法は登山道の道標のように私を新しい景色が見える高みへと導いてくれる。ならば、いつか自分で道を見つけられるように、まずは様々な道を経験していきたい。お稽古の際に先生はしばしば「焦らないことが大切です」と言われ、具体的なことはあまり仰らない。自分で答え見つけていく、探していくことは人生にも似ている。部活では様々な人と一緒にお稽古をするが、同級生よりも一年遅れて始めていることに少し焦る気持ちはある。しかし、自分のペースで茶道の道のを楽しみながら歩んでゆきたい。

茶道を始めてまだ1年も経っていない今、私は作法を形から学んでいる最中である。一つ一つの動作に慣れ始めたからこそ、初心を忘れず学ぶ姿勢を保ち続けたい。そのために、まずお稽古でのお軸や茶花、道具、お菓子などの知識を深める。そして、相容と場の雰囲気や季節感を共有するお茶会に参加する機会をもっと見つけ、茶の湯の全体像を理解する視点を養いたい。これらの学びと経験を、亭主として一碗のお茶をお出しすることに昇華させ、人生の中で幾度も出会うであろう一期一会の機会を大事にして、ひとを思いやることのできる社会人に成長してゆきたい。

未知の世界

防衛医科大学校3年（埼玉県）

松浦 海生

私はなぜ茶道を続けているのだろうか？茶道の何が好きなのだろうか？この文章を書き始めるにあたり、今まであまり考えたことのなかったこの問いに、改めて向き合ってみた。美しいお点前を見るのが好き、ただ目前のお点前に集中する時間が好き、美味しいお茶とお菓子に出会うのが好き、素敵なお道具の取り合わせを見るのが好き、頭を捻って準備したお茶会でお客様をもてなすことが好き。茶道を構成するどの一場面も好きなのだが、やっぱり一番はこれだと思ったのは、「茶道の深みの奥にあるものが私にとって未知であること」ではないだろうか。

高校1年で茶道部に入部したときから、私はたくさんの未知にふれる経験を繰り返してきた。その中でも、特に忘れられない記憶がある。入部して初めての初釜で、初めての濃茶を飲んだときのことだ。その日、冬晴れの午後に先生は華やかな着物をピシッと召され、私たちに一碗の濃茶を練ってくださった。そして回ってきたお茶碗の中の、いつもより数段濃い緑色をした液体を見て、私は覚悟を決めた。実を言うと、この頃の私は、抹茶が苦手だったのだ。甘いものが好きで、お菓子を食いたいという何とも不真面目な動機で茶道部に入った私にとって、抹茶は美味しいお菓子の余韻をかき消してしまう、余計なおまけのように感じられていた。普段の薄茶でさえ苦いなあと思っていたので、深緑色の濃茶を目の前にした私は、「これはきっといつものお茶よりもっと苦いぞ」と覚悟を決めて口をつけた。ところが、である。その濃茶は、甘かった。トロリとした口当たり、鼻に抜ける深い香り、苦みを超えて舌に伝わる茶葉の旨味と甘み。こくりと飲み込んで、私はほうっと息をついた。初めて、お茶の美味しさを知った瞬間だった。以来、私はあのお茶のような、お客様にほうっとしてもらえる一服を差し上げたくて、毎回お点前をしている。美味しいお茶になりますようにと願いつつお茶を点ててはいるものの、まだまだ研鑽中だ。

茶道をしていると、たくさんの未知に出会う。お茶会へ行くと、凝らされた工夫の数々や、亭主の美しい所作に、時間を忘れて見惚れてしまう。お稽古をしていると、同じ手順でお点前していても、毎回違う気持ちになる。その日の天気や気温、お道具の取り合わせ、そして自分を取り巻く今の状況。一つとして同じお茶会、同じお点前はなく、自分をもてなす側でも客の側でも、毎回何かしらの発見がある。そしてまたお点前をしたくなり、お茶会に行きたくなる。これが、私が今まで茶道を続けてきた理由なのではないかと思う。

茶道を始めて、今年で6年目になる。6年というと、友人からは長く続けているんだねと言われるが、はっきり言ってまだまだ未知なことだらけだ。生涯お茶を続けたとしたら、果たして私は茶道の何たるかを知ることができるのだろうか。いや、何百年の時を経て発展してきた、我が国が誇る茶道という文化を、私のせいぜい数十年程度の経験で咀嚼し消化しきれとは思えない。けれど私は、これまで経験してきた、「未知」のベールがひらりと一枚剥がれたときの感動を忘れることができない。そして、また何か一欠片でも新しい世界を知れるなら、私は茶



道を続けたいと思う。未知であるが故に、続ければ続けるほど、何度でも魅了されてしまう深さを秘めたお茶の世界。ああ、不可思議な世界に入り込んでしまったものだ。そんな思いを抱きつつ、私は今日もお稽古に向かう。

第一席

茶道の世界での出会いとつながり

筑波大学3年（茨城県）

御山 真帆

私が茶道と出会ったのは小学5年生のときです。初めて飲んだ抹茶の味わいとすべての作法に魅了されたことがきっかけでした。それから10年が経ち、昨年11月には大学の茶道部の部長に立候補し、「温故知新」の精神を胸に新入生の歓迎やお茶会の運営に全力を注ぎました。この10年間で、茶道を通じて様々な人との貴重な出会いがありましたが、特に昨年の経験は私の心に強く残っています。

まずは、今年の3月に南米ペルーへの留学の際に経験した文化交流イベントでの出来事です。ペルーという土地には抹茶も茶道具も存在せず、私が持参できる荷物にも制限がありました。それでも野点用の簡易のお道具を駆使して、着物を着て、英語での説明とお茶点で体験を行うことに挑戦しました。初めて抹茶を口にする現地の方は「ずっと飲んでみたかった。貴重な機会をありがとう」とうれしそうに話してくれました。私は彼らの反応を目の当たりにし、日本に帰国後の茶道部の活動をグローバルに改革しようと心に決めました。それまでは日本語を話せる人しか入部を受け入れていませんでしたが、英語での対応を進め、茶道の魅力をより広く伝えたいと強く思いました。

その後の4月に新たに入部してくれたのは、5カ月間日本に滞在していた2人のメキシコ人留学生でした。最初の稽古では、言語の壁と文化の違いがあることに不安でいっぱいでした。しかし、彼女たちの熱心さと前向きな姿勢に触れるうちに、その不安は消えていきました。私の説明に真摯に耳を傾け、理解しようとする姿勢を見せ、積極的に質問をしてくれました。異なる視点からの質問に対して一つ一つ考えながら答えているうちに、私も自分が当たり前だと思っていた価値観や環境に新たな気づきを得ることができました。彼女たちは、全く抹茶を飲んだことがない状態から、5カ月の間に薄茶の平点前を完全にマスターし、棚のお稽古まで終えることができました。最初の頃、彼女たちに英語で必死に帛紗の扱いを教えたり、豆からできている餡子の甘さに驚いたりしていた姿が懐かしいです。今では新しい留学生に茶道を教えるほどに成長していることがとてもうれしいです。また、帰国の際には「メキシコに帰っても茶道を続けたい」や「日本に再度留学できたら茶道部に入りたい」と言ってくれて、自分の好きな茶道で周りの人の世界を広げることができたことに大きな喜びを感じました。

また今年の5月には大学で茶会を開催し、小学生の時に指導して下さった先生方やお稽古場の方々がわざわざ足を運んでくださいました。コロナ禍の影響で長年会えなかった方々に、



大学でも茶道を続けて成長した姿を見せることができたことが、何よりも嬉しかったです。茶道を続けていたからこそ、こうした再会が実現したのだと感じています。

振り返ると、これまでの茶道人生の中で経験した数々の出会いが、私の人生を豊かにしてくれたことに深く感謝しています。留学先のペルーでの出会いや、大学での茶道活動、京都の裏千家学生セミナーでの他大学のお友達との交流など、本当に多くの出会いが私を支えてくれました。茶道を通じて、異なる文化や背景を持つ人々と心を通わせることができ、互いに学び合い、成長し合うことができました。もし茶道をしていなかったら、私の人生はどのようなものだったのだろうかと考えることもあるほどです。

現代はSNSを使って人と簡単に繋がれる時代であり、茶道部でもその利便性を活用しています。しかし、茶道を通じての深い交流やお茶席でのおもてなしは、言語や年齢を超えて人と人を結びつける力を持っていると強く感じます。茶道の魅力を信じ、10月には市が開催する文化交流イベントに筑波大学茶道部として初めて出店することが決まっています。困難もあるとは思いますが、一つ一つ解決して、地域の方々と新たなつながりを築けることを楽しみにしています。茶道との10年が私にもたらしてくれたものに心から感謝し、これからも新しい挑戦を続けていきたいと思っています。

第一席

茶会を創る

横浜国立大学3年（神奈川県）

杉山 万璃亜

私は現在3年生で、今年度から茶道研究会の会長を務めている。茶道は小学5年生のころから学校で始めた。今まで絶えず続けたのは、茶道の楽しさや奥深さに魅了されたからである。お点前の所作、お抹茶やお菓子の美しさに感動した。お点前を一つずつ覚えていく楽しさもあった。何より、自分の点てたお抹茶をおいしいと言ってもらえた時の嬉しさは、計り知れない。

会長になって、自分のお点前だけに集中するのではなく、全体を見て必要なお道具を用意したり、先生と打ち合わせをしたりといつも様々な仕事も増えた。

そんな中、毎年行っている夏の定例茶会が今年の7月に開催することに決まった。テーマである七夕に合わせてお道具を取り合わせ、主菓子はテーマに合わせて特注で作っていただいた。機織りをする織姫をイメージした糸巻の蓋置と、牛飼いである彦星をイメージした牛の図が描かれたお釜を使用した。また、二人を繋ぐ天の川の架け橋となったとされる鵜が蓋に描かれた特徴的な水指しを取り合わせた。こういったお茶会を一から考えることは、私にとって初めての経験である。本当にとても楽しくて仕方なかった。お茶会に来てくださるお客様の喜ぶ顔を想像して、もっとこうしたら、ここを変更したら、とたくさんのアイデアが溢れてきた。

お道具だけではなく、待合には、笹と短冊を用意し、お客様に待ち時間も楽しんでもらう工夫を施した。自分の願い事を書いて飾ることに加えて、他のお客様が書かれた願い事を見て話



すのもきっと楽しいに違いない。また、お茶券も、天の川をイメージしたデザインで一枚一枚手作りした。お茶券というのは、お客様が唯一持ち帰れる記念品であると私は考えている。これに関しては以前、他大学のお茶会にていただいたお茶券があまりにも素敵で感動し、いつか私もこういった楽しませ方をしてみたいと思っていたこともあり、今回制作してみた。

当日、お客様からお喜びの声や楽しかったとのご感想をいただいた。お茶席では、亭主や半東としてお客様と楽しく会話することができた。これが一からお茶会を創る楽しさなのだ実感した。待合の筐にはたくさんの願い事が飾られていた。世界平和や個人的な願い事、クスツと笑える願い事まで、様々なものがあった。これが話の一つになってくれたのかなと思うと、私も思わず顔が緩んだ。お茶券を大切に持ち帰ってくださる姿も見られた。お客様に、「また次のお茶会を楽しみにしています」とのお声をいただき、次もお客様と楽しい時間を過ごしたいと強く思った。今年度の次のお茶会は11月に予定している、秋の定例茶会である。3年生の集大成であり、この茶会が終わるのを機に茶道研究会を引退する。最後に最高のおもてなしをしたい。

現在私は、教師になるために教育学部で勉強している。先日、小学校で1か月間の実習をした。私は学校の先生の授業と茶道のお茶会には、似ている部分があると感じる。それは、子どもたち（お客様）に楽しんでもらえるような、分かりやすい授業（お茶会）をするところである。実際の先生方の授業では、子どもたちが生き生きと楽しそうに挙手や発言、話し合いをしている姿を見させていただいた。教科書だけでなく追加の教材を用意したり、子どもたちの実態に合わせて自身で教材を作成したりする先生もいた。ここには、子どもたち（お客様）に少しでも分かりやすく、楽しんでもらいたいという気持ち（おもてなしの心）があるのではないだろうか。こういった心持は、教師になる上で非常に大切であると思う。茶道のお茶会を通して、教師として必要な心持に気づくことができた。

茶道は、お客様という相手と楽しい時間を過ごすために、何をしたらよいのかを考え、様々な心遣いや細かい気遣いが生まれていく。そういった気持ちや行動が今後、茶道でも日常生活でもできるような人でいたいと思う。

第一席

離れて見つめる真の魅力

就実大学4年（岡山県）

中野 公瑛

毎年巡り来る出会いと別れの春。否が応でも前に進む為を選択を迫られる春は、どうも落ち着かない。

今年、大学4年生に進級し、これまでの学びに磨きをかけ、1つ新しい挑戦をする、そんな1年にしたいと考えていた。私は常にさまざまなことに挑戦したいという情熱が湧き上がってくる。こうなると時間の使い方を見直さざるを得ない。そこで苦渋の決断をした。それは、大



学入学以来続けてきた、「茶道の稽古を一旦お休みする」ということであった。

その時の私は自問自答し、納得する理由を自分の中で構築していた。大学生としての毎日は、講義や課題、勉強、アルバイトに追われ、まさに目まぐるしく過ぎていく。自分の成長の為の経験、そしてそれに必要な時間等々確保するための取捨選択。「一旦茶道を休むことが最良だ」。日々忙しさに押し流される中で、尤もらしい訳を築き上げ、己にそう言い聞かせて納得したつもりだった。

しかし、いざ茶道から離れてみると、思いがけない寂しさが寄せては返す波のようにじわりじわりと私の心に沁みだした。ふと、茶道のことを思い出すと、懐かしさとともに、あの時間がどれほど貴重であったが、どれだけ日常で荒れ狂う心を落ち着かせてくれていたのかを改めて実感した。

茶室に向かい、一歩足を踏み込むと、ピンと張った空気、耳心地の良い稽古の音、お茶の香りに包まれる。敬愛する先生、馴染みの顔ぶれの稽古をそっと見つめる。一つ一つ丁寧に、ゆったりと流れる心の込められた動作。言葉はなくとも、それだけで私の心も解けてゆく。その度に「やっぱり」と、改めて感じる自分がいた。

お茶室を一步出ると、時間の流れは速く、常に次の課題や目標に向かって駆け抜ける日々が続く。正直心に余裕は無い。如何に効率よく時間を無駄にせずやることをこなせるか。そんな状態であるから、物事の本質を見極めきれずに見切り発車なんてことは日常茶飯事である。色々なことを一気に考えざるを得ないので思考回路は大混線。自分と向き合っているつもりでも、どこか違うところを見ている状況だ。季節の移ろい、景色、風の香り、それは単なる背景となり、カメラのレンズ越しに見た世界のようにぼやける。

茶道から離れたとき、ひと時日常を忘れてちっぽけな自分と向き合う稽古、あの静けさと、空気と、音と、書ききれない茶室の「場」の全てが私の心にどれほどの安らぎを与えてくれていたのかを再認識した。私は茶道が好きだ、茶道は私の人生において欠かせない。私の心を、人生を豊かなものへと導いてくれるものであるということに改めて気づかされた。

この気づきは、恐らく私にとって初めてのものではない。なぜなら茶道をお休みするのは今回が初めてでは無いからだ。中学受験を機に次第に時間の余裕がなくなり、進学で新しい広い世界を目の当たりにし、興味の対象も一気に増えたことで茶道を続けることが難しくなってしまった。それまで小学1年生から6年生まで茶道は私の生活の一部だった。けれども、新しい挑戦に夢中になる中で、私はだんだんと茶道から遠ざかっていった。その後、中学・高校時代には茶道は私の過去の一部となり、その存在は心の奥底に静かに沈みつつあった。だが時折「もう一度茶道をやりたい」と思う瞬間が訪れることが何度もあった。その感情にはおそらく明確な理由はなく、漠然とした、昔の日々を追憶するようなものだったと思う。何か私を茶道に引き戻そうとしている。だがそれが何なのか、はっきりとは分からなかった。

そして再び別れを経験し、「やっぱり茶道がしたい」という、似た感情に揺さぶられた。しかし、今回は前とは似て非なるもの。この感情は、茶道が私にとって特別な存在であることを明確にしてくれた。茶道は私の心の深い部分に根を張り続けている。私にとっての「帰る場所」であり、心を整え新たなエネルギーを得るための源泉であることを再確認することができた。

離れることで見えてきた茶道の魅力。それは、心の在り方だったのだと思う。茶道は机に向かう勉強だけでは得られない大切なものを私に教えてくれる。外面的な美しさだけではない、



内面を見つめ、向き合い、己の在り方を見つめ直す時間を私にもたらし、内面的に成長させてくれる。また、慌ただしい日常で忘れがちな自然や物、共に過ごす人々への感謝の気持ち、相手を思いやり、互いに敬うことの大切さを思い出させてくれる。

再びお稽古に戻るとき、私は以前とはまた違った視点で茶道に向き合うことができると思う。忙しさの中でも、茶道で育んだ心を大切に、日々過ごしていきたいと強く思う。

第一席

なぜ茶道に惚れたのか？

広東外語外貿大学2年（中華人民共和国）

楊 睿

私が茶道と出会ってから半年が経ちました。短い時間でしたが、私はすでに茶道に深い感銘を受けています。茶道を初めて知った日のことを思い返すと、まるで昨日のことのようです。今学期の初め、私は日本の茶道文化に興味を抱いて茶室に足を踏み入れました。この旅が私の生活や気持ちにこれほど深い影響を与えるとは思ってもみませんでした。茶道の授業は、私が毎週最も楽しみにしている時間となり、さらには茶道に対して「もっと早く出会っていたら良かった」という気持ちさえ抱くようになりました。なぜ、このように深く感じるのでしょうか。

実は、茶道との初対面はそれほど楽しいものではありませんでした。最初に茶室に入ったとき、そこは厳粛で神秘的な場所だと感じました。茶室に入って最初にすることは正座です。先生は私たちに、正座を通して心を静め、外界の雑念を取り除くように求めました。しかし、一分も経たないうちに、私の頭の中には「足が痛い！」という思いしかありませんでした。幸いなことに、一分は長くなく、もう限界に近づいたところで先生がやめるように言いました。私はすぐに足を伸ばして楽にしました。その後、先生は茶室に入る際の礼儀やお茶の点て方、飲む手順について詳しく説明してくださいました。その時、これらの複雑なマナーを聞いて、私は「なんて面倒なんだ」と思わずにはいませんでした。しかし、次の実習の授業でその思いは全く消えていきました。

ある時の授業でこんなことがありました。私が茶を点てる役割を担当しました。先生の指示に従い、茶筌を使って抹茶を点てる動作一つ一つに集中しました。このとき、全ての雑念が消え去り、ただ茶の香りと動作の音だけが存在する世界に入り込みました。抹茶の鮮やかな緑色と器の美しさに心が癒され、茶道の深い魅力を実感しました。その瞬間、私は茶道がなぜこれほどまでにマナーを尊ぶのかを理解しました。それは環境や儀式を通じて心身を浄化し、茶会に参加する人が「和敬清寂」の茶道精神をまことに感じるようにするためです。

時が経つにつれ、私は正座の正しい姿を徐々に身につけ、足の痛みも次第に和らいでいきました。心の中の悩みや雑念を取り除き、清らかな心で茶会を楽しみ、茶道の精神を悟ることができるようになりました。正座をするたびに、一日の疲れを忘れ、学業や仕事の悩みから一時的に解放され、短いながらも長閑なひとときを得ることができました。そのため、茶室で過ご



す短い時間を非常に大切にしています。また、この間は、自己の内面と向き合う機会でもあります。茶室の静寂の中で、自分の心の動きを観察し、日常の喧騒から一時的に離れて内省する時間を持つことができます。だから私にとって茶道は、日常の喧騒から解放し、自分自身と向き合うための貴重な時間であり、その魅力を多くの人と共有したいと思います。

それと、もうひとつお伝えしたいことがあります。私の父はお茶を愛する人で、私が茶道の授業を受けていることを聞いたとき、中国と日本の茶道にはどんな違いがあるのかと尋ねてきました。私はすぐに答えられませんでしたでしたが、ふと周りを見渡すと答えが見つかりました——それは茶室の飾りです。父の書斎では、一方の茶盤と一組の茶具があればお茶を楽しむことができます。しかし、日本の茶室では、掛け軸や花などについても非常に厳しい規則があります。まさにこの掛け軸や一花一木の中に、茶道のもう一つの魅力を感じました——四季折々の自然との調和です。これこそが利休七則の「夏は涼しく冬は暖かに」という思想をしっかりと表していると考えています。例えば、端午の節句の前後に先生が選んだ花材は紫陽花でした。その独特の美しさは茶室に清雅な雰囲気添えるだけでなく、家族との再会を願う美しい思いも込めていました。このような準備を通じて、自然の美しさと移り変わりをより身近に感じることができ、日常生活でも季節の変化に敏感になるようになりました。

要するに、私にとって、茶道は単なるお茶の芸術ではなく、心の浄化と精神の向上なのです。その中で感じる静寂と調和、自然との調和を通じて、日常の中にある小さな幸せや美しさを再発見し、心豊かな生活を送り続けることができれば幸いです。私は茶道の魅力に心から触れ、今後も茶道を学び、さらに深く学んでいこうと固く決意しました。

以上が、冒頭で述べた問いに対する私の答えです。



茶道の未来

酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校2年（北海道）

阿部 日菜花

私の所属する茶道部は、部員が少ない。3年生が1人、2年生が3人、1年生はいない。このままだと私が卒業するころには廃部待った無しだ。そのため、私たちの活動は毎週のお稽古、学校祭でのお茶会の主催、地域のお茶会への出席に加えて部員確保への奔走だ。とはいえ地道にクラスメイトや同学科の後輩に一人一人声を掛けているだけだが。人数を見れば明白だが、この声掛けの成績は振るわず、何十人に声を掛けてやっと1人入部しただけである。だがなんと断るときに皆同じことを言う。遠慮がちに、「茶道って難しそうだし怖そう」と。私も入部前はそう思っていたので、大人しく退散し、その後そう思っていた理由を思案するまでがお約束だ。

私が茶道部に入ったのはゴールデンウィーク明けの5月終盤だった。当時、3年生はゼロ。2年生が4人ほどで1年生は私含めた3人だった。私は部内で一番新人でわからないこと、できないことだらけで落ち込む日々が続いていた。特に苦戦したのが茶碗を清めることだ。茶碗は使用法は違えど毎日使う身近な物だが、清めることは日常的にはしないため、よく茶碗ごと回したものだ。実際できるまでに1年ほどかかり、先生にご指導いただいた記憶が鮮明にある。このように日常生活にない、慣れない動作をすることに難しさを感じた。そしてもう一つ言われる茶道の恐怖感。その原因は和室であると思う。先生が怖そう、必ず正座をしなくては、というイメージが私にあったが、その根幹にあるのは畳の敷かれた和室という非日常が生む独特の緊張感がどこもない怖さを引き出すのだと思う。最初に茶道部に来て言われたことが「正座できますか？」だった衝撃は今でも忘れない。内心、日本人だからできるに決まっていると思ったのだが、後に先生から近年正座ができない人が増えていると聞き、日本独自の文化の正座が廃れていることに悲しみを感じた。それほど住宅や生活の欧米化が進み、和室は消え、正座する機会が減っている。それが悪だと言うわけではなく、生活や仕事などにおいて国際的な多様化が進む時代に、もっと日本の文化に日本自身が目を向けてもよいと私は主張する。

ありがたいことに、私たち茶道部とJICA（国際協力機構）の方々との茶道を通じての交流が昨年度にあった。数多くの多様な国から訪問してくれた彼らは、季節を主題とするお菓子の大きさに感銘を受け、初めて点てるお茶に楽しさを覚え、茶碗一つ一つの丹精が尽くされた職人技を見て感嘆の声をあげていた。また中国からの留学生とも交流する機会があり、彼女はお茶碗の正面を避けて飲む日本特有の謙虚さに胸を打たれたようだった。

このように日本には世界に感動を与える文化がある。それが今、少しずつなじみのないものへと変化しているのは惜しい。茶道をもっと身近にするには何ができるのか。私は初めは和室でなくても良いと思う。まずは地域のお祭りや地区センターなどでお茶に触れる機会を増やし、



そこで興味を持った人が和室で作法を覚えていく。地域に根ざした茶道というのも様々な層の体験が期待できる。また仕事に勤しむ人も多くいる。その人たちには会社の休憩室に茶道具セットを置き、気分転換がてらお茶を楽しむという方法もあると思う。それは茶道ではないと指摘されそうだが、まずはどんな形であれ体験することから興味は広がるのだ。私はまだ茶道を始めて1年ほどだが、細部まで心を配る、今も昔も変わらぬ日本人の思いやりの心に満ちた茶道が好きだ。私が生きている間に文化が途絶えることはあってほしくないし、伝承し続けてほしい。そのために日本は茶道を身近な文化にし、誇りを持って発信するべきだ。その信念を胸に、私は今日も部員を求めて奔走する。

優秀賞

茶の湯に学ぶ感謝の心

UWC ISAK Japan 3年（長野県）

林 美希

私は小学校の授業の一貫として、茶道を経験することができた。茶道について何の知識をもたないまま、他の小学1年生と共に一列に並び、お茶室に初めて入った日、私はこれまでに見たことのない張りつめた空気と、何とも言えない重厚な雰囲気を感じた。座る、立つ、帛紗をさばく、道具を動かすという一つ一つの動作が、とても特別なものに見え、幼いながら、「美しい」と感じたことを覚えている。中学で、私は迷うことなく茶道裏千家部に入部届を提出した。部活初日、校舎の外れに隠れた茶室でおもてなしをする先輩方の姿は、実に輝いていた。私もいつか、先輩方のように、美しいおもてなしで周囲の方の胸を躍らせたいと思うようになった。

しかし、入部から数ヶ月が経った頃だった。茶道をよりよく知ると共に、私は以前思い描いていた茶道とは異なる「茶道」に気づいた。それは、全ての物事に対する感謝の気持ちを表現する「茶道」だ。

感謝を表現する考えは、お作法にもはっきりと見られる。お客様は、お茶を飲み終えた後にお茶碗の模様や形を眺めることで、心を込めて作ってくださった職人の方々に感謝をする。拝見では、茶筌や茶杓の素材や、棗の模様と漆を鑑賞することで、亭主の心入れを察し、それに感謝をする。お茶を点ててくれた方に「頂戴いたします」という声かけをすることで、気持ちを込めて作ってくださった亭主への感謝の気持ちを表す。そして、お茶をいただく際にも、感謝の意を込めてお茶碗を天に向かって捧げる。また、お茶を点てる亭主は、無駄のない美しい所作でお点前をすることで、相手に清々しく感謝の気持ちを伝える。これらの数々の感謝を表現するお作法の中でも、私が一番重要だと思うのは、お辞儀だ。私はお茶杓や棗に触る前に、何週間もかけて美しいお辞儀を練習した。まだまだ練習中だが、今思い返すと、より美しいお辞儀ができるようになって初めて、お茶室で感謝を表現できるようになったような気がする。中学の茶道部では、お客様の立場と、お茶を点てる立場を何度も経験したが、体験の回数を重ねる度に、茶道における感謝の重要性を実感していった。



茶道の理解がさらに深まったのは、新しく入学した全寮制高校の茶道部での経験だ。世界80カ国以上から生徒が集まる高校での茶道の経験は、伝統的な一貫教育を提供する女子小・中学校での経験とはかけ離れたものだった。日本語が話せない友人たちに、声かけの発音や、先生方に対する礼儀を教えながらのお稽古は、ハプニング満載だった。例えば、年の初めの頃は、お稽古中に携帯を触ったり、先生のお話を聞かずにお喋りをしたりする生徒への注意がとても大変だった。しかし、お稽古の数を重ねるにつれ、集中のかけらもなかった生徒たちが、嘘のようにお稽古中に目を輝かせ、毎稽古真剣に取り組むようになった。その理由がどうしても知りたくて、思い切って尋ねてみたところ、彼らは茶道によって自分に感謝の気持ちが十分になかったことに気付いたことや、茶道が表す感謝の慣習に心を惹かれたことを話してくれた。茶道には、日本語や日本の慣習を知らない外国人にも感謝の心を深く伝える力があるということに気付かされた。

私が茶道を経験して改めて実感したのは、感謝の気持ちを常に持ち、それをできるだけ相手に表すことは、人間の心を豊かにしてくれるということだ。頃年、残念ながら世界の分断は進みつつある。しかし、だからこそ、私たちは小さいことにも感謝をし、それを表してゆかなければいけないと思う。鎌倉時代から現代まで受け継がれてきた日本人の素敵な文化を、これからも大切にしていきたい。

優秀賞

歩々是道場

渋谷教育学園幕張高等学校2年（千葉県）

井上 紗良

一步茶室に足を踏み入れた瞬間、私はこの空間の一部になりたいと思った。

茶道部の見学に行った。2年前の夏の終わりだった。文化祭のちょうど1週間後だった。まだ入口には「お茶会」の看板が残っていた。

文化祭の日、廊下で浴衣や袴を着た先輩達に擦れ違った。彼らは皆、どこかを目指して歩いて行った。後で友達に聞いたところ、彼らは校舎と離れて建つ茶室の方向へと向かっていた茶道部の先輩たちだった。私は、その場所に行ってみたくなった。

その茶室は木々に覆われていて、外からは見えない。そこに存在するという事は入学したときから知ってはいるけれど、どこから入ればいいのかも分からない。やっと見つけた入口から、私は一歩中に入ったのだった。

季節を重ねるほど、一步一步茶道を理解していく自分が感じられた。

盆略点前から始まって、炉、風炉、お茶箱、拝見つきのお点前、立礼席、と練習する内容が変わるごとに一つずつお点前を完成させ、それぞれの所作の意味を教えてもらった。

お点前が変わると、茶室のしつらえも改められる。風炉をしまい炉を開いたり、立礼席を組み立てたり。新しい道具にも出会う。夏と冬のお茶碗を入れ替えたり、初釜式や文化祭用の特



別な道具を出したり。自然と、茶室や道具のお手入れの仕方を知ることになる。

茶室の一部でも道具の一つでもある掛け軸にも、私は興味を持った。学校の茶室には数十種類のお軸があって、毎回、部活が始まる前にその日に選んだものを掛けている。中でも「歩々是道場」は、季節を問わず使える言葉のためお稽古で目にすることも多い。

「一步一步こつこつ努力し進んでいくことが修行である」というこの言葉の通りに、私はお稽古の度に、茶道に近付いていった。

茶道部の部長というのは、憧れの存在だった。前の部長も、その前の部長も、誰よりも、もっと茶道に近付こうといつも努力して、茶道の道を進んでいるような人だった。だから高校2年生になって部長に選ばれて、確かに茶道の道を進んでいる、と認められた気がした私は嬉しかった。

初めて茶室に入ったときの、左足からか右足からかさえ気にしていなかった、あの最初の一歩から、ここまで来られたのだ、と。ここからさらに先へ、進みたいと思った。

部長になってから、茶道部で、茶道のお点前のお稽古以外のことをする時間が増えてしまった。特に、文化祭の準備のために、書類を書いたり、会議に呼ばれたり、部活の予定を考えたり。仕事を任せられるのは仕方ないけれど、私はお茶が好きなのに。茶道部の運営じゃなくて、茶道の道をもっと進みたいのに。今までよりも茶道の道を前に進めなくなってしまった気がした。

ある日、禅語の本を読んでいて、あの「歩々是道場」の言葉は、本当は「日常生活の一挙手一投足が修行である」という意味だと知った。

お点前は、お茶を点てるだけではなく、様々な動作を含んでいる。その動作がなかったとしても、お点前は成り立つ。全ての動作が、お客さんにお茶を出すという目的に直結した動作という訳では無い。だがしかし、茶道においてそれらは、意味がある動作だ。日常生活における動作もこれと似たように、たとえ前には進んでいないように見えても、全て、修行の道を進んでいるという意味があるのだろう。

茶道を始めてから今までやってきた全てのことが、私を、そして私の茶道を、成長させるための修行だったのだ。私はどんなときも、茶道の道を歩いていたのだ。

私はこれからも、お点前に使うたった一畳の畳に収まらない茶道をする茶人でありたいと思った。ただ前へ進むのではなく、出会った全てのものに全力で向き合って、それらの力を借りて茶道の道を進みたい、と。



「私」のお点前

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校3年（神奈川県）

小澤 由莉音

——「お薄を一服差し上げます」

私は、8人のお客様に向かって礼をする。外では、やわらかな風に吹かれて、花が楽しそうに揺れている。母親の隣に座っているあの男の子は、目の前に置かれたお菓子を早く食べたくて、うずうずしているのだろうか。いや、きっと私のお点前が始まるのを待っているに違いない。そう、私の高校生活最後のお点前が、今始まる。

建水を運ぶのは、今でも少し緊張する。お稽古を始めた当初は、柄杓を落としてしまうことが何度もあった。その度に、先輩が替えの柄杓を渡してくれたのが、とても嬉しかった。優しい先輩方に囲まれて、茶道初心者の私も安心して部活に馴染むことができた。

しかし、お点前は覚えなくてはいけないことが多く、私は苦戦していた。そんな時に先輩が教えてくれたのは、「お点前の手順には、それぞれ意味がある」ということだ。なぜその順番でやるのか、なぜその位置に移動させるのか……。考えてみると、お点前がとても洗練されたものに見えてきた。お道具を移動させるとき、それは必ず次の動作につながっている。手の動きは、お道具の配置によって効率的に変化する。

手順の意味を覚えると、お点前の動作が頭に入りやすくなった。そして、一つ一つの動きをより丁寧に意識できるようになった。お客様のために心を込めてお点前をしよう、という心の余裕までできた。

——「お菓子をどうぞ」

お茶を点てるときは、何があってもお客様のことを思って茶筌を振りなさい。これは、茶道を始めたばかりの頃に、先生や先輩から教わったことだ。当時の私は、「きれいできめ細かい泡を点てないといけない」ということばかりを考えてお茶を点てていた。しかし、その言葉で、私たちはお客様のためにお点前をしていると気付くことができた。せっかく私の拙いお点前を見ていてくれるのだから、お客様には「私が満足するためのお茶」ではなく「お客様のためだけのお茶」を点てる必要がある、と思えるようになった。

今回のお茶会は、茶道に慣れていないお客様が集まっている。だから、お茶が濃くなりすぎないように注意する。

どうか、私の気持ちが伝わりますように。

半東が正客様にお茶を運ぶのを見守るときが、お点前の中で一番緊張する時間だ。お茶を一口飲んだ正客様を見る。そのとき、少しだけ、ほんの少しだけ、正客様が笑ったように見えた。私は、心の中で盛大にガッツポーズをしながら、帛紗を腰につける。これが、お点前の中で一番うれしい時間だ。

——「お仕舞にさせていただきます」



もうすぐ、私の高校生活最後のお点前も終わってしまう。改めて、私は茶道部に入部して本当に良かったと思う。

茶道を始めてから、私は茶道部で、先生や先輩方、友人など、様々な人に支えられ、多くのことを学んできた。

思い返せば、お点前をしている時に思い出すのは、お稽古のときに先生や先輩が言っていた言葉や、帰り道に友人とお点前の手順について話したときの言葉だ。

茶道部で出会った人々によって、私のお点前はできていると、私は思う。この教えは、この先も途切れることが無いように、後輩たちへ伝えていかなければいけない。先輩方が私にしてくれたように、私も自分の言葉で後輩に「茶道の心」を伝えていきたい。

今日の私は、お客様に楽しい時間を提供できただろうか。この時間がまだまだ続いてほしいと思えるような時間を、共有することができただろうか。高校生活最後のお点前は、これで終わりだ。茶道部で出会った先生や先輩方、友人に教わったことをこの先も胸に、私はゆっくりと礼をする。

優 秀 賞

人とのつながり

山梨県立甲府第一高等学校3年（山梨県）

野中 未来

「お点前頂戴いたします」

心地よい静けさの中、少し緊張気味の私の声が響く。初めて茶道に出会ったのは、久しぶりに会う叔母の家を訪れた時だった。

「未来ちゃん、今日はお茶会をしましょう」

そう言って着物に身を包んだ叔母は別人のようだった。真剣な表情でお茶を点てる姿が印象的だった。無駄のない、静かで丁寧な動作。その空間には、ただ心を澄ませる静けさと、茶道を通した私と叔母の何か特別なつながりが満ちていた。あの日から、私は茶道の魅力の虜になっている。

春、入学した高校に茶道部があると知り、迷わず入部を決めた。あの叔母の姿が忘れられず、茶道を通じて、あの何か特別なつながりを自分の手で作り出してみたいと強く思っていた。茶道部の活動は、毎日が新鮮で楽しいものだった。あの叔母の凛とした姿に少しずつ近づけている気がしていた。しかし、あの時叔母と私との間で感じた特別なつながりを作り出すことはまだできていなかった。

叔母に、私が茶道部に入部したことを伝えると、

「ぜひ、親戚の皆さんとお茶会をしましょうよ」

と提案された。私の親戚の家は各地に散らばっており、年に一度会えるかどうかという関係だった。茶道を通じてまた親戚に会えることに、私の胸は高鳴った。それに何より、叔母ともう一



度茶道ができる。あのつながりを自分の手で作り出せるかもしれないという期待があった。叔母と相談の上、お正月、親戚の集まりでお茶会を開くことにした。叔母と一緒にお道具を選び、心をこめてお茶を点てると、親戚たちはとても喜び、「未来ちゃんも大きくなったねえ」

と声をかけてくれた。私の点てたお茶を笑顔で美味しいと飲んでくれる姿を見たとき、心が温かいもので満たされた。その時、あの特別なつながりは、お茶を飲んだ人の笑顔があるからだ気づいた。今まではお茶の点て方を間違えないことに必死で、お茶を飲んだ人の反応を見ることはなかった。一方通行ではなく、茶道を通してお茶を飲んだ人と心を通わせて初めて、茶道の力が発揮されるのだと思った。お茶会の後、自然と親戚同士がうち解け、会話が弾んでいく様子を見て、やっと茶道を点てる側として一人前になれると思った。それ以来、年に一度のお茶会は親戚の間で恒例行事となり、私が点てるお茶を楽しみにしてくれる親戚がいることが、私にとって大きな力となっている。

この経験を通して、茶道には、人と人をつなぎ、心を通わせる貴重な瞬間を生み出す力があることを実感した。これからも茶道を通じて多くの人と素晴らしい時間を共有していきたい。

優秀賞

つらぬき留む

鶴見大学附属高等学校3年（神奈川県）

西村 奈波

梅雨が始まる気配も見えない、6月上旬。からりと晴れて、陽の光が空の高い位置からさしていた。大本山總持寺にゆかりのある学校ということでご招待いただいたのは、瑩山禅師700回大遠忌に伴う献茶式。坐忘斎御家元がお座りになる点前座のほど近く、ほんの数メートルというところに席をいただいた。お点前を直接拝見することはできなかったけれど、音は肅然とした静けさの中に染み入るようにして、私にとどいた。衣擦れの音、釜に柄杓を預ける音、茶筌が点てる音。それらを聴いていると、目で見るとよりもかえってお点前を感じられたように思う。繊細な音の一つひとつが御家元の動作を感じさせ、点と点が繋がって線になるように、お点前を感じる。お点前は、単なる動作の羅列ではない。その動作のそれぞれが「繋ぎ合わさって」初めて、お点前になるのだと。そう思った。

8月に入り、気温もぐんと上がった。夏休みの只中、8月11日。学校茶道連絡協議会の夏季研修茶会が行われた。暑い盛り、蝉しぐれの中のお茶会で、私たちの学校は薄茶席を担当した。9席200人以上のお客様をお迎えし、そのうちの一席で、私はお点前をさせていただいた。他学校の茶道部の皆さんや先生方の前でお点前をするのは初めてで、さんざめくような蝉の鳴き声も聞こえなくなるほどに、緊張していた。次の動作は何だったか。水指はいつ蓋を取るのか。柄杓の取り方は、預け方は。しっかり覚えたはずなのに、当たり前のことが緊張からどんどん抜け落ちていく。焦燥が私を捕らえた。頭がいっぱいになったそのとき、献茶式でのことに思



いが至った。そうだ、お点前は動作を「繋ぐ」のだ。

私は一つ息をついて、柄杓に手を伸ばした。緊張で耳に入らなかった蝉の声も、今はよく聞こえる。柄杓を釜に入れると、とぷと小さな音がする。柄杓がなめらかな弧をえがいて、お茶碗に湯を注ぐ。切り柄杓も、茶筌が点てる三層の音も、みんなゆるやかに繋がって、一つのお点前になっていく。私はこの時、お茶室に入って初めて周りに意識を向けた。私が点てたお茶を、半東さんがお客様に「繋ぐ」。お客様が美味しいと言う声が、その笑顔が、お客様と私の心を「繋ぐ」。お茶室の中の全てが、まるで糸を通したように繋がっているような気がした。

茶道に相応う言葉を訊かれたら、私は迷わずこの「繋がる」という言葉を挙げるだろう。そもそも、私たちが茶道に関わることができているのも、茶道が伝統として受け継がれてきたからだ。それは、遠い時代の人たちや茶道に関わってきた全ての方が、茶道という文化を繋ごうと尽力したからに他ならない。お点前は「繋ぐ」のだ。動作を、だけではない。私たちの心を。そして、今と昔を。私は、それを繋ぐ「糸」になりたい。

私はまだまだ未熟だ。分かっていない事だらけだと思う。でも幸運なことに、気づく機会をいただいた。心を繋ぐことの心地よさに。茶道の奥深さに。一碗のお茶が、全てを繋ぐという事に。だから私はきっと「糸」になれる。心を心に、過去を未来に、繋ぐことができるような茶道を、私はしていきたい。

優秀賞

道の始まり

西尾市立鶴城中学校1年（愛知県）

飯伏 花帆

それは美しい宝石のようでした。

私と茶道の出会いは、幼稚園の頃にさかのぼります。卒園茶会というイベントで、保護者に抹茶運びました。練習時に頂いた一服を、私は忘れられません。抹茶のきめ細かい泡は美しい宝石のようでした。近くの園児が抹茶を残している中、私は、すっかり抹茶に魅了されました。それからしばらくの間、自宅で客人に抹茶を点てると言い出して、母を困らせたそうです。

それ以降も、抹茶と関わる機会に恵まれました。小学校5年生になると、迷わず茶道部に入部を決めました。小学校の茶道部では、見よう見まねで先生の動きを覚えようとしていましたが、不器用な私は、抹茶を点てる時に茶筌をしなやかに動かせず、ロボットのような動きになってしまいました。上手に泡が点てれるように、抹茶を買ってきて、家で何度も点てたり、飲み方の練習をしました。そのかいもあり、6年生の全校茶会では、飲み方のお手本を全校生徒と保護者の前で披露することも出来ました。

中学校の部活動も茶道部を選択しました。小学校での経験があったので、私は「その延長線だろう」とたかをくくっていました。しかし、入部して初めてのお茶会で見た先輩の姿は、私がこれまで見ていたものとは、全く違っていました。所作が丁寧で美しいことはもちろん、お



お客様と和やかに会話し、お客様も笑顔でした。

「同じことをやっているのに、なぜこんなにも雰囲気が違うのだろう」と疑問を持ちました。

さらに、もう一つの違いは、茶道文化検定の勉強です。毎年学校で団体受験をします。

私は、「なぜ茶道のお点前ではなく、このような勉強をしないといけないのか」と思いました。ただ先生の動きを真似する小学校の茶道部の活動との差に戸惑い、部活動にも身が入りませんでした。すると部活動で先生から、次のようなことを教えてもらいました。

「茶道というのは、ただ動きを覚えて、それを繰り返すことがゴールではありませんよ。一つ一つに歴史や相手を思いやる心があり、それを学び続ける道のようなものです」

部長の先輩からも「せっかく私たちのお茶会に来てくれたなら、楽しんで笑顔で帰ってほしいよね」という話がありました。

これらの言葉を聞いた時、私は目が覚める思いでした。ただ決められたことに何も考えずに真似するだけでは、それは茶道になりません。動作の背景なども知ったうえで、相手をよく見て、おもてなしの心を持って接する。それが、これからの私にとって必要な心構えなのです。

夏休みに入り、本格的な練習や検定の勉強が始まりました。これまでとは違って、積極的に質問したり、前向きな気持ちで取り組みました。先輩からも「花帆ちゃん、がんばってるね」と褒められた時は、嬉しかったです。

「茶道って、こんなにも奥が深いんですね」

「はい。先生もまだ道の途中ですよ」

中学校一年生の私は、まだまだ分からないことだらけで、茶道という道の始まりの一步目を踏み出したばかりです。これからも長い道を一步一步前進できるように、努力していきたいです。

優秀賞

留学で学んだこと

長崎大学教育学部附属中学校3年（長崎県）

川口 紗季

私は今年1月からカナダに留学しており、現在は夏休みで帰国しています。

留学の目的は語学習得ですが、留学をするにあたり父より「日本人としての誇りを持って留学するのですよ」と言われました。私にはどういうことなのか、はっきりわかりませんでした。すると、「次、日本に戻って来る時までの宿題だよ」と言われました。

お茶の先生とは、地元長崎で開催されている文化庁伝統文化親子教室の「子供茶道教室」で出会い、5年になります。先生にこの課題を話すと、「茶道をあなたの自慢にきなさい。茶道は日本の誇りであり、世界中の人が興味を持っていますよ」と教えていただきました。それから先生はお茶のお稽古前に「外国では1人で着物を着なければなりませんね」と、着付けの練習から着物の畳み方も教えていただきました。先生の熱心なご指導で、難しかった着付けも出来るようになりました。



カナダで初めてホストファミリーの前でお茶会をした時は、大変緊張しました。もちろん着物も着ました。テーブルを床に見立てて「一期一会」の扇子を置き、庭の可愛い黄色の花を飾りました。ホストファミリーからは、「お茶に他に必要なものはないの？」や「とても楽しみよ！」といった温かい言葉をかけてもらい、私もますます張り切りました。

お茶会はお茶を点てるだけでなく、客（ホストファミリー）と心を通じ合わせる事が大切だと先生に習っていましたので、私はお菓子の意味や扇子の「一期一会」について一つ一つ説明しました。「この茶碗素敵ね」や、お茶会が終わったあと「またお茶会してね」と言ってもらった時は言葉にならないほど嬉しく思いました。

その後、数回のお茶会をしているうちに、茶道は私の自信になりました。

時にはホームシックになることもありましたが、持って行った着物を着たり、茶碗や棗にさわることで、準備して送り出してくれた母を思い出して、乗り越えられたように思います。

お茶会をしたことで異文化間のコミュニケーションが円滑になり、心を通じ合わせる事ができました。茶道を通じてカナダのホストファミリーとの架け橋を築けたことは、私にとって貴重な経験でした。

この素晴らしい体験は、留学の準備をしてくれた母や、茶道を英語で説明するための言い回しや着物の着付け・外国でのお茶会のやり方などを丁寧に教えていただいた茶道の先生のおかげだと思います。

さらに留学前のことになりますが、淡交会長崎支部創立75周年記念大会の学校茶道のお席で「長崎支部子ども茶道教室」の私たちもお運びをいたしました。お席で坐忘斎御家元様にお茶を差し上げることができ、御家元様に褒めていただいたことがとても感激でわすれられません。

カナダでのお茶会の経験を通じて、私はさらに茶道を深く学びたいと思うようになりました。学び続けることで、茶道の深さと美しさをより多くの人に伝え、父が教えてくれた「日本人としての誇りある国際人」になれるよう成長していきたいと考えています。

優秀賞

コーヒーポットとスープ皿

沖縄県立首里高等学校2年（沖縄県）

菊川 乙音

こつん。心地いい音が波紋のように広がると、その余韻とともに甘い香りが漂い、白い紙に載ったお饅頭が運ばれてきた。ふわーっと鼻を抜ける小豆の風味。目の前では茶碗の中に抹茶が入れられていく。口がまだ甘さを覚えている状態でいただく温いお茶は格別だった。

中学の頃から海外留学が夢で、日本文化をもっと勉強したいと思っていた私は、まず茶道部に興味を持った。文化祭で呈茶席あるから来てよ！と友達が誘ってくれたのはちょうどそんな時だったのだ。せっかくだから雰囲気だけでもと参加したのだが、終わる頃には入部を決めていた。あの独特の世界観、お点前をする友達の真剣さ、丁寧さ、美しさに心が動かされたのだ。



お稽古を始めた後も、少しでも近づきたいという思いが原動力となっていた。一連の動きができるようになるだけでなく、もっと所作を美しくしたい。課題の尽きない私に外部から指導にいらっしゃる先生は、一つ一つ動きの意味を教えてくださいました。その意味に則ると効率的でかつ美しくなる、洗練された茶道の所作。習い事で舞踊を学んでいる私には、この「意味のある美しさ」がすごく魅力的に感じられた。

茶道部に入って早4ヶ月が経つ頃。日本に興味を持つ外国人にお茶を出さないか？という誘いがあった。普段のお稽古ではお茶席を設けられないので、私たちはこのまたとない機会に、ぜひ！と食い気味で返事をした。やると決まると早速テーマ設定から行い、より日本の雰囲気味わってもらうために用意するものと考えていった。3月だったのでひな祭りをテーマに、お雛様が描かれたお茶碗や桜のお茶菓子など、至る所に工夫を散りばめた。すると改めてお道具の美しさや種類の豊富さに驚かされた。陶器にも茶杓にも棗にも、それぞれにおいて職人さんがいて、どの方向にも長く道が伸びている。準備の作業は、果てしない宇宙に散らばった星を紡いでゆくようだった。お稽古の先に広がる奥深い世界の片鱗に触れ、興奮が収まらなかった。

それからしばらくしてアメリカへの交換留学が正式に決まった。私はぜひ現地でお点前を試みたいと思い、海外で道具を揃えるにはどうしたら良いか先生にアドバイスを求めた。すると返ってきたのは意外な答えだった。

「コーヒーポットにスープ皿で十分。あるもので工夫してやりなさい」

私は思わず耳を疑った。ついこの間、お道具に詰まったこだわりを知ったばかりだったので余計に驚いたのだ。でもこのエッセイを書いているうちに、あの先生の言葉は決して海外だから仕方ない、という妥協ではなかったのだと気づいた。思い返してみると呈茶席の時、私達は会ったことのない方々、起こるかもしれない事態を想像し、抹茶の代わりに白湯を、和菓子の他に洋菓子を準備したりした。全てはお客さん皆に楽しんでいただくために。私が海外でお点前するのだから目的は同じはずだ。現地の方々に日本文化を押しつけ、誉めてもらうためではない。相手を思っておもてなしするためなのだ。だから日本最高級のお茶菓子よりむしろチョコを包んだ饅頭など現地の方々の好みに合わせた工夫が必要だった。「おもてなし」とは、柔軟になることなのかもしれない。となると海外という未知の場で、お点前をしたいなら今第一に私がすべきことは、お稽古に励み、自分に芯を作ることだ。深く根を張った木ほど枝を伸ばせるように、柔軟になるためには経験と、知識と、精神と。周りの環境が変わっても揺るがないものを自分の中に深く作らなければならないのだ。

コーヒーポットにスープ皿。今の私の目標はそこにある。

こつん。先生が見守ってくださる中、今日も全神経を集中して茶筌通しをする。



「こころ」のコミュニケーション

沖縄県立普天間高等学校3年（沖縄県）

新城 星奈

私は茶道という日本文化が好きだ。静かな空間の中にお湯を注ぐ音、お茶を点てる音が響き渡る。この空間がなんとも心地よい。私が茶道に出会ったのは小学生の頃だ。母に連れられて呈茶会に参加した。亭主が点ててくれたお茶をいただいた。それまでは苦いと思い込んでいた抹茶は思いがけず甘く、何より水屋、お運び、亭主の所作の美しさに感動した。私は抹茶が好きになった。そして、いつか私もあんな風にお客さんをもてなしてみたいと思ったが、小学校、中学校の頃は茶道部がなかったため、その後茶道に触れることなく月日だけが過ぎた。高校生になり茶道部があることを知った。私は、茶道部が活動している家庭科室に向かった。家庭科室では先輩方が真剣な表情で所作の練習をしていた。先輩方は優しく作法を教えてくれ、お菓子もおいしかった。私はすぐに入部することを決めた。毎週1回の活動がとても楽しかった。私はどんどん茶道に魅了され、もっと楽しい部活にしたいと思い自ら部長に立候補した。

部長に就任した私は、今まで以上にお点前を練習した。私も部員もある程度お点前やお運びができるようになったため、定期的に呈茶会を開き生徒や先生方を招いた。日々のお稽古の成果を披露するために、そして、茶道に興味を持ってもらうためだ。呈茶会后、改善点を考え、次に活かすために自分自身と向き合い稽古に励んだ。呈茶会后のお稽古で、外部指導者である先生が私に、

「茶道では多くの人に関わっている。案内、水屋、半東、亭主、そしてお客さん。この中の誰が欠けても呈茶席は成り立たない。そして、亭主とお客さんが茶道を通して互いの心を通じ合わせ、一度しかない呈茶席を作っている。そこで、亭主は相手のことを考えてお茶を点てることが大切だよ」

という茶道において大切な気持ち、心構えを教えてくれた。この時に私は気づかされた。私は、これまで自分とだけ向き合い自分のお点前だけに集中し、お客さんを十分にもてなしていなかった。私は、小学生の頃に参加した呈茶席を思い出した。亭主は小学生の私でも飲みやすいように抹茶の量を少なくして点てていたのだと思った。私は、お客さんと心を通わせられていなかった。私の中でどういう亭主でありたいのか自分の中で分かった気がした。これからは、お客さんとの「こころ」のコミュニケーションをとり、同じ瞬間は二度と戻ってこないという気持ちで、一席一席を大切にそして誠心誠意おもてなしをしようと思った。

高校3年生の春休みに先生方に感謝の意を込めて呈茶会を開いた。この呈茶会ではお客さんである先生方をもてなすために室礼は茶道部員で用意した。掛け軸は「それぞれが唯一無二の花を咲かせるように、他人と比べることなく自分自身を磨き自分らしさを大切にしていこう」という意味を込めて「桜梅桃李」を書いた。お花は「感謝」という花言葉が込められているカスミソウを生け、水屋をお客さん側からも見えるようにして楽しんでもらえるように工夫した。私は、亭主として美しい所作を心掛け、お茶を飲む人にとってちょうど良い加減の美味しいお



茶を点てられるように、お客様の気持ちを考えて点てた。呈茶席後、先生方から「所作に感動した」「飲みやすかった」「茶道の奥深さが分かった」などのお言葉をいただいた。私は、これが自分が目指してきた茶道だと感じた。この時、初めて互いに「こころ」のコミュニケーションを取ることができたと思った。

私はこれからも互いに「こころ」のコミュニケーションを取れるような呈茶席を目指していきたい。そして、茶道に魅了された一人として、茶道のすばらしさをこれからも多くの人に伝えていきたい。



若鮎が教えてくれたこと

國學院大學久我山高等学校2年（東京都）

三浦 理紗

「明日、試験が二つあるのにな」

今日は部活がある。明日は試験があるのに、と。正直、早く家に帰って試験の準備をしたい。だが、茶道もやりたい。ネガティブな感情とともに茶室へ足を運ぶ。急ぎ、茶道具の準備を済ませ、帛紗をさばき、道具を清める。うまくいかない。帛紗が乱れる。しゃかしゃかとは程遠い音でお茶を点てる。味はよくわからない。おしまいの挨拶をして、今日の茶道が終わりへと向かう。最後に主客総礼をし、やっとおしまいだ。コロナの影響もあり、和菓子は家でいただくことになっている。和菓子を手に取り、さあ、家に帰ろう。明日の試験で頭がいっぱいだ。

早速、勉強に取り掛かる。ひと通り勉強が落ち着いたところで、今日の和菓子を食べしてみる。あれ？若鮎。そういえば、夏服に衣替えする時期だ。若鮎を口に含んだ瞬間、透明でもちもちとした求肥が涼やかな夏の始まりを告げるようだ。普段季節など気にすることなんてないのに、なぜか若鮎に惹かれた。心が穏やかだ。余裕を感じる。

今日の部活はどうだったのかを振り返ってみる。丁寧に茶道具を扱ったのか。お茶を楽しんだのか。そう自分の心に問いかける。数時間前の自分は清らかな心を忘れていた。ただ、お茶を点てることが出来ればいいと思っていただけではないか。和菓子を持ち帰るとき、若鮎だということに気づいただろうか。乱れた心は、季節をも忘れてしまうのかと。茶室に試験への焦りを持ち込むべきではなかった。

若鮎は私に余裕を与えてくれたのだ。余裕があれば、季節の移り変わりに目を向けることができる。それから私は、日常にそっと潜む、道端に咲く花にだって目を向けることができた。今までは気にも留めなかったシロツメクサだって。特に季節を感じるのは紫陽花だ。雨が降ると色を変える。

季節の美しさを味わうことで、自然の美しさや移ろいを感じ、自分自身の心が豊かになる。日本人が古来より季節を大切にする美意識を改めて感じた。身の回りの小さな変化で季節を感じる、繊細で優しい心を持ち続けていきたい。きっとその心は、点てたお茶をおいしくさせる。これからは、その豊かな心でお点前を続けていきたい。



先人に学び、そして。

横浜市立東高等学校2年（神奈川県）

鉢呂 朋佳

「水屋は、プロが入るんだよ」私は、茶道部に入って今年で2年目になる。この言葉は、先生が常々おっしゃっていることだ。去年の私は、いまいちこの言葉の意味が飲み込めていなかった。どちらかといえば文字通り「見」習いがやっているイメージであったから。

しかし、私達が茶道部を中心となって動かすようになってから、その意味が腑に落ちた。

「確かに、これはプロにしかできない」どのタイミングでお茶を点てるのか。お出しするのか。いくつもお茶会を経験していないと、いつが正しいのかも分からない。お茶を点てる準備が早すぎれば冷めてしまうし、遅すぎれば正客様に合うように出すことができない。

場を見極める力は、どれだけ知識があっても経験が伴わなければ何も発揮できないと、この数ヶ月の間のお茶会で痛感した。百聞は一見に如かずとは、まさにこのことなのだ。

経験といえば、お点前を学んでいるときもそうである。他の人が練習をしているのを見ながら手を動かしているのといないのでは、少しずつ差が広がっていた。

何度も繰り返して行いながら手をすべらせていると1年経っていても存外忘れていないもので、後輩に教えていくときに忘れていると思っていても、一度始めればこの手は、体は覚えていた。こぼれたと思っていた水が戻ってきたような経験は、これが初めてだった。しかも、一つ一つ糸をたぐるように思い出しながら、それは尚洗練されていく。より迷いがなく。より水の流れるように。より、この体に動きが馴染むように。

茶道を通して、私は「百聞は一見に如かず」以外にも、いわゆることわざとなっているものを身を以て体感することが多くなった。例えば、「急がば回れ」である。準備に追われて焦ってショートカットしようとするれば、そうするだけ失敗してしまう。常に冷静沈着で焦ることなく、とまではいかずとも、確実に一つ一つできる方を選んだ方が結局は早い。

ただの部活動の一つであったのが、これから先の人生にも影響を与えているように感じる。礼儀を学ぶ時もあれば、人の繋がりを学ぶときもあり、それらを高校生の中に知ることができたのは、とても幸せなことなのだろう。私が今年得たものは、後輩たちに受け継いで、ずっと続けていて欲しいと願う。

プロにはまだ程遠いかもしれないが、文化祭やお茶会で、今まで以上に人と場を見て、少しずつでも近づけるようにしていこうと思う。



茶道を広める為に私が出来ること

下北沢成徳高等学校2年（東京都）

平野 瑞香

茶道と聞いて、茶道に触れたことがない人は何を想像するのだろうか。おそらく茶を点てる様子や色とりどりの和菓子を思い浮かべる人が多いことだろう。

勿論、それらも魅力的だ。しかしそれだけではない茶道の良さを、皆に広めるにはどうしたら良いのか。そこで私は、インターネット上に茶道についてまとめたWebサイトを作成することにした。もともと高校の情報の授業でWebサイト作成について学んでいた為、その応用だ。しかしそう簡単にはいかない。「どうすれば知らない人の興味を持たせることができるか」と何度も試行錯誤した。茶道の尊き侘び寂びの精神を一枚のページに収めることがいかに難しいことか思い知った。完成したら中高生のWebサイト作成コンテストに応募し受賞することを目標にし、本格的に取り組んだ。

その試みは約5ヶ月の時間を要した。この期間、茶道の部活動では盆略点前や御園棚を練習していた。茶道自体高校に入ってから本格的に触れた私には難しい点もあったが、先生や先輩に優しく教えていただいた。きっと一人では分からなかっただろう。茶道は個人の作法だと思っていたが、本当は色々な人と繋がっていたのだ。茶碗や季節を模した菓子の美しさを共有し、茶室という空間の中で主人と客が互いの心を調和させ敬う。なんと奥深いのだろう。「和敬清寂」という言葉が今まで広く知られている理由がよく分かった。古くから大切にされたこの茶道の精神をもっと広めたい。私はより一層Webサイト作成に奮起していた。どのようなフォントが見えやすいか、茶道という言葉から連想するのは何色か。その他にも興味を引き出すような工夫を凝らした。

そして、ついにそのWebサイトは完成した。もともとコンテストに提出する為の作品だから、ネット上に投稿したことはない。その為応募のボタンを押すのが、ひどく怖かった。自分以上に凄いサイトを作っている人はいる。自分のサイトは低レベルだと自己嫌悪した。それでも勇気を出して応募した。

応募から1ヶ月後、先生に呼ばれた。何だろうと思いながら先生の言葉を待つ。

「サイトのコンテスト、入賞しているよ」

その言葉を受けた時の喜び、安心、驚き……今でも忘れられない。自分が懸命に作ったものが認められた。茶道に触れ、サイトを作らなければこのような経験をすることはできなかつただろう。

私は茶道を始め、新たな価値に触れることができた。作法を覚え、今回のような件で自信もついた。この日本で長く継承された「茶道」を多くの人に伝えていきたい。



後輩から先輩へ、先輩から後輩へ

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校2年（神奈川県）

五郎丸 紗衣

私が高校2年生になって強く思うことは「後輩たちにはたくさんの経験をさせてあげたい」である。

私は、高校1年生のときに茶道部に入部した。そして、今は高校2年生となった。

私が高校1年生のときの先輩方は、中学生のときから学校の茶道部に入部しており、お点前は細部までもとても綺麗でただ圧倒されていた。わからないことも先輩方に聞けば、丁寧にわかりやすく教えてくれた。しかし、実際に私が高校2年生になって今までどれだけ先輩方に頼っていたのかに気づいた。4月に入ってきた後輩に教えようと思っても、全然覚えておらず、結局私も先輩のお点前を見ていないと、次に何をしたらいいのかわからなかったのである。まだ4月のときは先輩方がいたため、わからないことは先輩方に聞けばよかった。しかし、5月に先輩方が引退して6月になると、高校1年生にやり方などを聞かれても、すらすら答えることができず、結局先生に私も一緒に聞かなくてはならなかった。いくら先輩方と茶道歴が違おうとしても、去年とさほど変わっていない自分にとっても驚いたのである。

また文化祭の準備では、高校1年生の去年とは比べものにならないほど大変だった。お茶会のテーマ決めから、使う道具、半東の言葉など、すべて自分たちで何とかしなくてはならない。もちろん、高校1年生のときに文化祭の準備はやっていた。しかし、今思い返せば、熟知している先輩方がほとんどやっており、私は先輩方の指示があってから動く、いわゆる消極的な準備、むしろ手伝いになってしまっていたと思う。そのため、今のような何をしたらいいのかよくわからないという状態になってしまっているのだと思う。そのような経験をする中で、「後輩たちにはこういう思いを持ってほしくない。だから私が、後輩たちにたくさんの経験をさせてあげたい」と強く思うようになった。そういうふうになるようになってからは、できる限り後輩たちにお点前を見せたり、実際にやってもらったりするだけでなく、文化祭の準備に少しでも多く関わられるように、来年は後輩たちだけでどうにかできるように、仕事を振ることを意識している。

この経験によって、仕事などは指示を待つのではなく、自分から聞きに行くことが大切だということを、身をもって学ぶことができた。誰かの指示を待っているだけでは、指示役がいなくなってしまうときに、行動することができなくなってしまう。だからこそ、自分から動く「主体性」が大切だと、深く感じた。主体的に行動することで、たくさんの経験をする事ができるはずである。また、部活で初めて後輩をもって見て、後輩を育てることはとても大切だということも学ぶことができた。今の後輩たちにも来年には後輩ができ、そして先輩になる。私たち先輩が、後輩たちに技術やこの部活ならではのものもしっかりと伝えていかないと、どこかでそれらが途絶えてしまう。何年も茶道部が続くように、私たち先輩が後輩たちにできる限りのことを教え、後輩たちに来年に活かして欲しいと思う。これらは茶道部だけに限ら



ず、今後の学校生活や社会生活でも重要になっていくことではないだろうか。

このように、私は学校茶道を通じて、多くの経験をする、またはしてもらうこと、そして後輩たちの育成が大切だということを学んだ。後輩たちが私と同じことを思わないですむように、たくさんの経験をさせ、そしてまた自分が同じことを思わないように、より多くのことを経験したり学んだりするために、私から主体的に行動を起こしていきたい。

第一席

茶道と私の3年間

巣鴨学園中学校3年（東京都）

大橋 優樹

お茶を点てていてふとこう思うときがある。「もし自分が茶道をやっていなかったらどうなっていたらろう」と。

おそらく何も始めずにつまらない毎日を過ごしていただろう。

学校茶道を始めて3年が経った。最初はふくさのたたみ方もお茶の点て方も全く分からなかった。しかし、先輩方がふくさのたたみ方や真・行・草のおじぎの仕方、お菓子のだし方など基本的な所作から丁寧に教えてくださった。そのとき、後輩に所作を教えられる先輩が私にはかっこよく見え、そのような先輩に強い憧れを抱いていた。それから私は先輩の後ろをついていくようにお稽古に励んでいた。

1年前初めての後輩ができた。今までのように先輩の後ろをついていくだけではだめだと私は新年度に入ったときから強く思い、いつでも基本的な所作が教えられるよう準備をしていた。

後輩が部活にやってきた。初めて人に茶道の所作を教えるのでうまく教えられるか不安だったが、自分なりに精いっぱい教えることができた。1年生の時に憧れていた先輩に少し近付けた気がしてうれしかった。その後も後輩はたくさん来たが、所作を教えたり役割分担をさせたりする中で、私が1年生のときもこうだったのだろうと先輩の苦労を知った。

そして、私は今中学3年生だ。中学校全体を担う年にもうなったのだ。今では憧れていたつるべのお点前も完璧にできるようになり、点茶盤のお点前もできるようになった。そして来年には茶道部の班長になるかもしれない。茶道という文化は昔から今日までたくさんの人々によって継承されてきた。

だから私たちも学校茶道や巣鴨学園の茶道部を継承し、そして世界に茶道という日本文化を広めていきたい。

お茶を点てていてふとこう思うときがある。「今日まで茶道を続けてきたおかげで、茶道を世界に広めたいという夢をもって毎日が過ごせているのだろう」と。

最後に、今まで茶道をやる上でお世話になった遠方からわざわざいらっしゃっているお茶の先生方や丁寧に所作を教えてくださった先輩方、そして共に所作を磨きあった同期やお道具を買ってくれた両親に感謝をしたい。



ありがとうございました。

これからもこの方々にはお世話になると思うが、これからは私自身も感謝される人でありたい。

第一席

茶道の“会話”

昌平高等学校2年（埼玉県）

高野 栞風

茶道と触れ合うこの時間は、私にとって魔法のひとつだ。そんなひとつの間に、言葉では伝えきれない茶道に関する“会話”をしているのだと私は感じる。気持ちを察するとまではいかないが、亭主の気持ちのこもったお茶には、「ゆっくりしてってください、存分に楽しんでってください」といった言葉が聞こえる。反対に、お客様のお茶をいただいている動作や、飲み終えて茶碗の絵を見るといった所作には、どこか「とてもおいしかったです、素敵な一服でした」という返事が聞こえてくるのだ。もちろん、コミュニケーションは茶会を開く際に欠かせない一つの材料であるため、実際に会話はする。しかし、やはり言葉を交わさないところでも、「くつろいでもらおう」「楽しんでらおう」とする亭主の“声”がとても心地よく、気持ちがいいなと感じているお客の“声”が、自然と聞こえてくるのだ。そのことに気づいた時、私の体には衝撃と感動という電流が流れた。純粹に素晴らしいと思った。静かな茶室の中で繰り返される、多くの“音”“声”“匂い”…茶道を取り巻くすべてが、私に話しかけているようだった。ほんの数十分の間にたくさんの“会話”をした私は、悩みが解決した時に似た、すっきりとした気持ちが心全体に広がっていくのを感じた。このような文化が、私たちが存在する千年以上も前からあったのだ。そしていまだこの文化が続いていること、ユニバーサル化が続く今も消されることなどなく、それ以上に外国にまで知れ渡り受け継がれていること。そんな事実、つい私は感嘆の息を漏らしてしまう。言語の壁がある別の国からも愛される茶道は、私の感じた“言葉の発しない会話”があるからではないのか。異国の地の人々も、みな同じ気持ちを分け合えるから、茶道は愛されるのではないのか。茶道を通してする会話は、全世界共通の言語なのではないか、とさえ思ってしまう。

この素晴らしい経験をもっと多くの人にしてほしい。声のない会話を、茶道の会話を実感してほしい。そんな私の思いを、これからも私の茶道にこめていきたい。



基礎を積み重ねたその先で

鶴見大学附属高等学校1年（神奈川県）

西尾 暁翔

「茶道とは何か」そう問われた際、中学生時代の私は答えることができなかつたでしょう。私は中学生時代茶道部に所属していました。しかしながら新型コロナウイルスの影響もあり、空点前の稽古しか行うことができず、感染者増加のピークと活動が重なった際にはお茶を飲むことすら叶わない状況でした。そのような環境下での3年間でしたが、日本の伝統文化が好きで入部したこともあり、帛紗捌きや茶筌通しなどの所作の美しさにふれながら仲間たちと空点前をしている時間は至福のひとつでした。

中学校を卒業し、私は今年の春、鶴見大学附属高等学校に入学しました。部活については中学生時代に積み重ねた経験を生かしたい思いが強かったので、迷わず茶道部に入部することを決めました。この時の私は自身が茶道の本当の魅力を知らないことに気づけていないのでした。

入部してすぐに、とても素晴らしい部活だと思いました。私の中学校の茶道室の3倍以上の広さがある立派なお茶室、美しいお茶碗、心優しい部員の皆様と魅力を挙げ始めると止まりませんでした。中でも私が素晴らしさを感じたのは顧問の巻島先生がお茶の先生ということでした。実は私の中学校の茶道部の顧問の先生はお茶の先生でなかったため、月に数回外部のお茶の先生にお越しいただいてお稽古をしていただいていたのです。そのため毎回の部活動で巻島先生直々にご指導いただけることが何よりも嬉しいのです。

入部して1ヵ月ほどが経過したある日、私の耳に衝撃的な情報が入ってきました。なんと、御家元がされる御両尊献茶式に参加させていただけるというのです。正直とても驚きましたが、それよりもこれほど貴重な機会をいただけたことに対する有難さの方が大きかったです。そして迎えた献茶式当日、私は總持寺の厳かな雰囲気緊張しつつも1時間御家元のお点前を拝見いたしました。とても美しい所作の一つ一つが今でも脳裏に焼きついています。献茶式が終わり、記念撮影をすることになると、当然のことではありますが、参加者の方々が一斉に私たちの方向を向きました。御家元と写真を撮らせていただける機会は生涯に一度だってないことが普通ですので、私は感謝で胸がいっぱいでした。そのような中で御家元は「ごめんな、長いこと座らせてもうて。はやく終わらせることもできたんやが、お点前はそういうものじゃないねん」と仰いました。このお言葉を聞いて、私は初めて茶道の本当の魅力に気づけたような気がしました。中学時代から茶道はおもてなしの心と学んできましたが、具体的にどのようなことを指し示すのか真に理解していなかったのだと、どこか後悔のような感情も浮かびました。茶道の本当の魅力はその空間にいる全ての方々を敬い、その方々に感謝をこめておもてなしをするという点であると気づくことができました。

献茶式から2ヵ月ほど経った今年の8月に開かれた研修茶会でお客様をおもてなしする側になると、ますます茶道の本当の魅力を実感することができました。私たちは全員で協力して準備を行い、お客様は一服のお茶を楽しんでくださる。この関係性もまた茶道の魅力なのだと。



中学生時代に積み重ねた空点前の基礎が全て無駄だったのではないかと日々の稽古で感じることもありましたが、基礎を積み重ねたからこそ有難い機会をいただくことができ、入部以前の自身では気づくことができなかった茶道の本当の魅力に出会えたのです。私の成長に尽力してくださった全ての方々に感謝するとともに、「茶道とは何か」という問いを自身に投げかけながら日々精進して参ります。目標はあれどゴールはない、そんな茶道人生を目指して。

第一席

平和のとりで

湘南学園高等学校3年（神奈川県）

多田 奈緒美

昨年度茶道部部長となり、鎌倉学校茶道連絡協議会主催の学生研修茶会において立礼席を担当した。鵬雲斎大宗匠が100歳を迎えられた年であったため、大宗匠がお書きになったお軸や箱書きされたお茶碗、春秋棚などお好みのお道具を揃えた席であった。大宗匠が「一盃からピースフルネスを」の理念で海外へ茶の湯の精神を伝えられたことも学んだ。

昨年秋に高校の研修旅行で訪れたカナダのブリティッシュ・コロンビア大学に、新渡戸記念庭園茶室がある。太平洋の架け橋となることを望まれた新渡戸稲造博士に因んだ庭園にある、裏千家の茶室である。庭園の楓の葉が色付き、訪れた人々が日本の秋を楽しんでいた。

私が生まれた米国の町にあるイリノイ大学にも、裏千家の日本館というものがある。日本人や日系人、現地の人々、留学生など多くの人々が訪れ、日本文化を発信する拠点となっている。大宗匠が同大学の名誉博士号を取得された年は、偶然にも私の父が大学院を修了した年と重なり、同じ卒業式で壇上に上がられるのを拝見できた。海外でも自分の身近なところに茶道が伝えられていたことに感心すると共に、大宗匠が世界各地で茶の湯を広められていたことを実感した。

カナダ研修旅行では、現地交流校やホームステイ先でお茶を振る舞った。現地の人々はとても熱心にお点前を見て話に耳を傾け、海外での日本文化への関心の高さを肌で感じ、茶道は日本国内だけでなく、海外でも通用するものであることを実感した。相手を理解しようとする意志さえあれば、国や文化が異なっても心を通わせ合うことが出来る。そして茶道には、互いに敬い合う場を作り出す力がある。心を込めて点てたお茶を前にすれば、自然と両者とも和やかな気持ちになる。そこには必ず思いやりの心がある。「和敬清寂」の四文字が表す意味や、大宗匠の「一盃からピースフルネスを」というお言葉の意味を少し理解できたように思えた。

昨年秋に鶴岡八幡宮で行われた献茶式では、千宗史若宗匠のお点前を拝見した。お点前やお道具の全てが普段見ることの出来ない貴重なものだった。周りのお客様が熱心に拝見している中、私も一つひとつの所作を見逃さないようにお点前を見つめていた。静かな空間に水の音だけが響いていた。お点前を拝見した後、学生席でお運びをした。大人のお茶会は初めての経験で緊張したが、若宗匠をはじめ先生方に温かく見守っていただき、励ましのお言葉もいただき



た。厳かな雰囲気の中でも穏やかな優しさが感じられた。

これからも「和敬清寂」という言葉を大切にしながら茶道を続けたい。その上で、言葉や文化の垣根を越えて日本と世界との架け橋となる活動を続けていきたいと思う。

第一席

茶道を通して成長！

愛知県立猿投農林高等学校3年（愛知県）

森下 初香

私は3年生になり、高校の茶道部の部長になりました。小さい頃から人前に立って話したり、積極的に何かをすることが苦手で、一度もリーダーという立場になったことがありませんでした。リーダーってどうするのだろう？ゼロからの出発です。まずは先輩から引き継いだ事は行えそうな気がしました。しかし、内面的なサポートや気配り等は自分の事だけで精一杯。後輩の気持ちを読みとる事などとても無理。考えれば考えるほど不安ばかりがつのり、部長としてうまくやっていけるか心配でした。

4月になり新入生が入部。お菓子のいただき方やお茶のいただき方などを教えるようになりました。自分がいつもやっていることなので教えるのは簡単だろうと思いましたが、実際に言葉にするとうまく伝わらず、どのように説明したら分かってもらえるか言葉を探すのに焦ってしまい、最初はとても苦戦してしまいました。1年生に理解してもらうためにどうしたら良いか考えました。

- 1、しっかり自分の中で復習をして準備をする。
- 2、先生に教えて頂いた理解しやすい言葉で説明する。
- 3、わからない人には個人指導をする。

実際に所作を見せるのに加えて言葉で説明をすることができ、少しずつですがうまく教えられるようになりました。焦りがなくなり細かい所作を近くで見せたりと余裕がでてきました。

4月28日に行われた市民対象のガーデニングフェスタでは亭主としてお点前をしました。いつもの平点前とは少し違う御園棚のお点前ということにとっても緊張しましたが、絶対に失敗しないという気持ちで毎週練習しました。当日自信を持って堂々とお点前ができたことで先生からも褒めていただき、日頃の積み重ねの大切さを知ると共に自信を持つ事ができました。また、お客様として来席して下さった知人から、「とてもおいしかったよ」などの声を聞き嬉しく思いました。しかし、茶席で初めてお茶をいただいたお客様からは「少し緊張した」という声も聞きました。この言葉を聞き、私はたくさんの人に気楽に楽しくお茶に親しんでほしいと思いました。

私達茶道部は学校祭で茶道体験を行い、校長先生や教頭先生をはじめ大勢の先生、生徒にお茶の点て方、お菓子やお茶のいただき方を各部員が担当指導。静かにと考えていましたが、楽しんで行ううちに笑い声や「うまくできないな」などワイワイとなってしまいました。しかし、「楽し



かった」「またやりたい」「自画自賛、おいしかった」という声があちこちから聞こえとても良い雰囲気でした。この様な機会をたくさん持ち、茶道を身近なものとして気楽にお茶を楽しんでいただきたいと思います。

近頃は多種の文化教室があるなかで茶道は人気がありません。しかし、日本に住む私達はまずは日本の文化を知ることが大切かと思えます。私は季節の和菓子とお抹茶を飲みたいと思入部しましたが、茶道を通して人前に立つ事、人に言葉で伝える事、継続する事の大切さ等たくさんのお話を学びました。大勢の人に茶道の良さを知っていただけるよう頑張りたいと思えます。

最後になりましたが、以前先生に「お茶を出すときは笑顔を大切に」と言われました。私の理想の人間像はいつも笑顔で人に気楽に話しかけられるような人間です。よく緊張すると笑顔を忘れてしまいますが、このような人間になれるようにこれからも茶道を通してたくさんのお話を身につけていきたいと思えます。

第一席

茶道がつなぐ人と人との出会い

愛知県立半田東高等学校2年（愛知県）

檜垣 翠花

桜の花が散り、葉桜となった頃、お世話になった先輩方が引退し、何年も受け継がれてきた茶華道部の歴史というバトンを受け取った。もう先輩に頼ってはいられないという状況が、私を奮い立たせた。

私は、高校生になり茶華道部に入部した。部活動見学の時に見た作法室や先輩方のお点前に心を奪われたからだ。始めは覚えることが多くあり、常に頭の中が混乱していた。入部して、数ヶ月が経過した時に東山荘で行われた学校茶道交流茶会に参加した。他校の方々と交流できるととても貴重な機会だ。初めは緊張と期待が半々だったが、やがて大きな不安へと変わっていった。お運びを完璧にできる自信がなかったからだ。菓子器を持って、茶室に一步入った瞬間、いつものお稽古とは違う配置にとまどい、体が上手く動かなかった。深呼吸をして心を落ち着け、何とか最後までやり遂げることができたが、満足といえる内容ではなかった。

初めての学校茶道交流茶会が終わり、先生が茶会のホームページのリンクを送ってくださった。私は令和5年度の茶会テーマを見てはっとした。「一期一会」だ。調べてみるともとは茶道の心得を表した語で、茶会に臨む際は、その機会は二度と繰り返されることのない一生に一度の出会いであることを心得て、誠意を尽くすべきことをいうと分かった。振り返ってみると、お客に対して誠意を尽くしていた、お菓子やお抹茶をお出しする際に感謝の気持ちは込もっていたとは思えなかった。自分のお運びのことばかりにとらわれすぎてしまい、その結果お客との出会いや交流を楽しむということができていなかったと思う。

高校2年生になり、2回目の参加となった学校茶道交流茶会。私は、この日のために何度も



練習を重ねてきた。大丈夫だと自分で自信を持って思えるようになるまで。本番の私の心には、少し緊張があったが不安の2文字はなかった。初めて出会う方々一人一人との出会いに感謝して、しっかりと相手の目を見てお菓子、お抹茶をお出しした。茶室でお客と言葉を交わす回数はいらないが、お客の微笑んでいる姿を見ると、今日初めて出会ったはずなのに、なんだか心が通じ合った気がして、私はとても嬉しい気持ちになった。しっかりと練習を重ねてきた学校茶道交流茶会で、昨年満足といえなかったことに対するもやもやが私の心から去っていったような気がした。

年に1度行われる、学校茶道茶流茶会いつもの慣れ親しんだ仲間とは違い、その日に初めてお会いする一生に一度の出会いであるかもしれない方々に、お菓子やお抹茶をお出ししたり、交流したりできる貴重な機会。お点前やお運びを完璧にきちんと行うこともとても大切だが、一つ一つの出会いに感謝して、交流を楽しむことも重要なことだと私に気付かせてくれた。茶華道部に入部して、多くのことを学び経験を積んできたからこそ、茶道は人と人との出会いをつないでくれる、まるで「架け橋」のようだと感じられた。そして、茶道のすばらしさを実感できた。次にやってくる舞台は、私の学校で行われる文化祭だ。お点前とお運びをすることに緊張はあるが、どのような出会いがあるかとても楽しみにしている。来てくださった方々との交流を楽しむことができるよう、力強く鳴く蟬に鼓舞されつつ、私はお運び、お点前の精度をさらに高めていく。

第一席

一生の趣味

富山県立魚津高等学校3年（富山県）

長谷野 ゆい

私が茶道を始めたのは、中学校に入学したての頃、茶道部に入部したことがきっかけだ。当時の私は、少し苦いと感じられるお抹茶や、大福や団子、あんこの入ったどら焼きなどの和菓子が苦手だった。そんな私が茶道部に入部した理由は、体験入部で見た先輩方のお点前をする姿に心を動かされたからだ。初めて見る茶道の道具やお点前。特に惹かれたのは、所作の過程に散りばめられた、何気ない“音”である。建水が載った棚を引く時の“スッ”という音。茶筌通しの時の、お茶碗に茶筌があたる“コツツ”という音。柄杓で湯を汲み、お茶碗に注ぐ時の“コポコポ”という音。お抹茶を点てる時の“シャシャッ”という音。これらの音は私の気持ちを落ち着かせてくれた。また、音によって感覚が研ぎ澄まされ、集中することができたし、日頃の勉強などの大変なことも頑張ろうと思えた。

中学1年生の冬。入部して半年が過ぎ、ようやく慣れてきた頃だった。新型コロナウイルスが流行し、何をするにも「感染対策」が必須となった。その影響はもちろん部活動に及ぶことになる。それまでは畳6畳のこじんまりした和室で活動していたが、「3密」を避けなければならないことから、調理室での活動に変更となった。冷たいステンレス製の調理台の上で盆略点



前をして初めて畳の温かさを知ったし、そのありがたみも実感した。お菓子やお抹茶をいただく時以外はマスクをしなければならないという制限も、私にとっては窮屈に感じられた。普通に活動できることが幸せだったことを、初めて感じた。

高校に入学し、茶道部に入部した。実は、中学生の時、私と同学年の茶道部の生徒はいたが、ほとんど部活に来ておらず、同学年が自分だけの活動だった。そして、高校でも同学年で茶道部に入部する生徒がおらず、私一人での活動となった。正直、寂しいと思うことはあったし、先輩でも後輩でもなく、気軽に話せる同級生の仲間が欲しいと何度も思った。それでも私が部活を辞めずに続けてきた理由は、ただただ茶道が好きだったからだ。無心になってお稽古することで、日頃の勉強など大変なことにも集中することができた。また、人との関わりや、思いやりの大切さを知ることができた。先輩や後輩と関わりながら部活をすることは刺激的で、有意義な時間だった。様々なお茶会を経験していく中で、亭主またはお客様との関わりもあった。時にはお客様から「お抹茶美味しかったよ」「ありがとう」などの嬉しい言葉もいただいた。茶道は私に心の安らぎと、相手を思いやる心を教えてくれた。

高校3年生となり、周囲も受験ムードになっている。私は、勉強などの悩みを一時でも忘れさせてくれる茶道の時間が大好きだ。5年以上続けている茶道はもはや私の生活の一部になっている。今後も当然茶道を続けていくつもりだ。将来は、学校で指導者として生徒に茶道を教えて、私が学んだように人との関わり大切さを生徒に教えていきたい。また、茶道を通じて人との関わりを大切にして、今よりもさらに相手を思いやって行動ができるようになりたい。

第一席

「ことば」で繋がる茶道部

滋賀県立石山高等学校2年（滋賀県）

橋柿 遙

私が所属している茶道部は裏千家で、稽古を始めるまえに必ず皆で「ことば」を暗唱します。「ことば」には茶道の心得が包括されています。しかし私が「ことば」の重要性に気がついたのは入部からかなり時間が経ってからのことでした。

高校に入学してすぐのこと、クラスでは部活は何部に入るかの話題でもちきりでした。私は「週に1日か2日で休日はオフの部活がいいなあ」など漠然と考えているだけでした。しかし後日、私は廊下に掲示されていたポスターを見て何部に入るか即決しました。週に1日でさらにお菓子を食べられる。私は茶道部に入ることに決めました。歓迎茶会を終えて入部1日目を迎えました。普段あまりすることのない正座に戸惑いながら先輩方を横目に見ると背筋がびしっと伸びていて、特別にかっこよく感じられたことを覚えています。彼女らは両手を合わせ、目を閉じて「ことば」を暗唱し出しました。私を含め、何も知らない新入部員の子たちは、予期せぬ出来事にただ茫然としていました。「ことば」の暗唱が終わったところで、「1年生も覚えてもらうからね」



と先生がおっしゃいました。後日私は面倒臭さから覚えずに部活に行きましたが、暗唱の時間はまさに苦痛でした。時の流れがかなり遅く感じたことを覚えています。日を重ねる毎に覚えてはいましたが、「ことば」を唱えることに意味があるとは微塵も思いませんでした。部活が楽しい、もっとしたいと思うことも、1年生の前半にはあまり感じられていないことでした。思い返せば、それは同じ学年の子たちに嫉妬していたことが理由の一つとしてあったと思います。お点前がぐんぐん上手になっていく友達をみていると、自分には向いていないのかもしれないと不安に思うことが頻繁にありました。とにかく泡をつくりたい一心で茶筌を雑に扱ってしまっていた気がします。しかし友達は私にコツを教えてくれたりアドバイスをくれたりしました。私はそのときふと「ことば」の一つ目の心得を思い出しました。「他人をあなどることなく、いつも思いやりが先にたつように。」友達はこの心得を遵守できていると感じました。自分ができていても横柄な態度をせず、むしろ同じ土俵に立って意見をくれる。私はその友達だけでなく部活の全員が思いやりの気持ちで溢れていることに気がつきました。誰に頼っても良い。私は邪魔な嫉妬心やプライドを捨て新しい気持ちで部活がしたいと思いました。お茶を点てる時も、以前までは自分の点てたお茶を見られることが憂鬱で仕方が無かったのに、とにかく美味しいお茶を飲んでもらいたい一心でコツを意識し上手に点てることだけを考えるようになりました。次第に部活は楽しく感じられるようになり、週1回に物足りなさを感じるほどでした。

2年生になり、新しく入ってきた後輩はやはり「ことば」に戸惑っています。しかし私は後輩もいつか「ことば」の重要性を意識する瞬間がくると自信を持っています。「ことば」を唱えることで一回一回の部活に新しい気持ちで臨めます。しかしそれよりも大切にしてほしいのは、最後に記されている心得です。「豊かな心で、人々に交わり、世の中が明るく暮らせるように」自分一人だと思うと視野が狭くなってしまいがちです。一度まわりに目を向け、豊かな心を持って茶道部の一体感を感じてほしいと思います。先輩が引退されるのは心細く辛いことですが、茶道部の「ことば」の伝統は変わらず持ち続けたいと思います。

第一席

「お茶席」をつくり上げるとのこと

兵庫県立御影高等学校2年（兵庫県）

平田 美郁

「水屋」と「正客」という言葉を初めて聞いた時、私は何を意味しているのか全く分かりませんでした。茶道部に入部するまでこの2つの役割の存在も知らず、茶道といえば「お点前をする人がいる」という印象でした。そんな私が、昨年11月上旬に行われた兵庫県高等学校総合文化祭という大会で、「水屋」と「正客」の役割を担当することになりました。1年生だった私にとっては初めての大会で、どんな雰囲気なのか予想ができませんでした。

「水屋」としては、よりお点前を担当する先輩がやりやすいように、お茶席をスムーズに進められるようにする。そのことを中心にお茶を点て始めるタイミングや、それぞれの役割につい



て何度も相談し合いました。その成果もあって、緊張していた大会当日でもお互いを支え合って、常に周りを見ながら行動することができていたと思います。大会での経験を通して、その後の部活動では「常に周りを見る、先を見据えた行動をとる」ことが少しずつできるようになってきました。

「正客」としては、稽古の段階から不安な気持ちでいっぱいでした。半東を担当することになっていた先輩とは「はっきり相手に伝わる声で話すこと」を大切にしようという話をしました。そのために、大会当日の朝には会場近くの公園で一緒に声を出す練習をしたり、会場で実際に声を出してみたりしました。迎えた大会当日は、お菓子の味が無味に感じるほど緊張していたことを覚えています。相手校の半東の方との間で特に印象的だった会話は「好きなお茶花はなんですか」というものでした。当時の私は、お茶花についての知識はほとんど無く、どのような花が今の季節に合うものなのかも全くわかりませんでした。それでも、自分の好きな花であった「椿の花が好きです」と答えたところ、相手校の方からだけでなく、お稽古を指導していただいている先生からも「良い返答だったよ」と言っていただけて、とても嬉しかったです。次第に半東の方に対して自分からも質問を投げかけたり、相手の言葉に反応ができるようになったり、自分もこのお茶席という空間を一緒につくり上げていると感じることができました。とても緊張していましたが、先輩との練習の甲斐もあって相手に伝わる声で自分の役割を果たせたと思います。初めてのことで不安を抱えながらも、一緒に出場した部員と支え合うことができました。練習の時から大変なこともありましたが、今となっては楽しかったねと話せる思い出になりました。今までは、人前で即興で話すことに対しての苦手意識が強かった私ですが、正客の経験を通して、自信と少しの度胸がついたと思います。

大会を経験した私にとって、「お茶席」はお点前を担当する人だけではなく「水屋」や「半東」などの亭主側に加えて「正客」などのお客さんも一緒になって作り上げていくものになりました。亭主側もお客さんも周りに気を配ることで共に温かい雰囲気の中で、参加している全員にとって楽しい席にすることができると思います。お茶席で大切なことは、自分だけではなく、周りの人のことも考えて、参加している全員が楽しめるようにすることなのだ改めて感じることができた一日でした。

第一席

茶道が私に教えてくれた、グローバルな和の精神

近畿大学附属高等学校2年（大阪府）

須田 悠加

私は茶道を高校の部活動で始めた。幼稚園の頃の茶道体験で食べた栗転がしが忘れられなくて、「部員になればまたあの味を堪能できるのではないか」という何とも幼稚な理由がきっかけだった。しかし、今となっては、私にとっての茶道は「日本と世界を繋ぐ架け橋の一つ」と捉えるほどになっている。それは私が経験したカナダ留学が契機である。



私はカナダの語学学校に通い英語の上達に励んでいた。学校ではクラスメイトと互いの母国の文化について話す機会が多く、その際に私が「高校で茶道を学んでいる」と答えれば、皆瞳を輝かせた。特に「茶道っていつからあるの?」「茶道はただお茶を飲むだけなの?」といった質問が多く、驚きと興味の入り混じった表情で私の説明を聞いてくれた。茶道を日本の伝統文化としてある程度身近なものだと感じていた私にとって、それほどまでに興味深げな表情を浮かべ、沢山の質問を投げかけてくるのが、始めはとても不思議に思えた。彼らからの質問に少々戸惑いながらもできるだけわかりやすいように答えると、私の返答全てに驚いて感動していた。その様子を見て私にはある一つの考えが浮かんだ。それは「茶道は外国人にはあまり知られておらず、彼らにとって茶道はまだ未知数なものである」というものだ。この考えは少しマイナスの印象が強く聞こえるかもしれないが、私は「日本と世界を繋ぐ架け橋」の一つとなりえるポテンシャルが非常に高いと感じた。なぜなら、グローバル化が進み世界との関係性が重要視される現代社会において、茶道の魅力を伝えることで今以上に日本文化に興味を持つ外国人が増えるのではないだろうか。他国の文化に触れるのは必ず貴重な経験になる。そうすれば世界との交友関係が広がる。この上ないほど素晴らしいことではないか。

私は留学生活で様々な人と関わった。その関わりの中で、茶道を通して学んだ「和」の礼儀や思いやりの心が交友関係を築く上でとても役に立った。言語の壁や年齢の壁など無数の壁が立ち上がる中でのコミュニケーションは大変困難で神経が疲れる。私は何度もそれらの壁にぶつかり、どうすれば良いのだろうと沢山悩み色々なことを試したが、どれもそれほど効果はなかった。そこで一度考えをリセットして自然体で過ごしてみた。すると今までの苦労が嘘のように相手と打ち解けられた。私はなぜなのかと考えて、茶道を通して触れた「和」の心のおかげだと気づいた。茶道で培った、他人を思いやり、協力し合い、助け合う心が、相手との距離を縮めるきっかけになっただけでなく、私自身も幸せにしてくれたのだと。そしてそれは茶道を楽しんで学んでいる中で自然とできたことだった。「茶道」という伝統文化を学べて本当に良かったと心から思った。このような経験も茶道を学ぶ意義なのだと私は考える。

私の茶道を始めた理由はとても滑稽だ。しかしそのような私でも茶道から多くのことを学び、感じ、成長することができた。それほど茶道は奥深くて無限大の可能性がある日本が誇る伝統文化であり、私は本当に感謝している。私はこれからも「和」の心を忘れずに「日本と世界を繋ぐ架け橋」である茶道を学び続けて次世代へと伝えていきたいと強く思う。

第一席

海の向こうまで届け

兵庫県立国際高等学校2年（兵庫県）

神谷 あかり

茶道は人と人を繋ぐ。私がそんな茶道を好きな理由。

ひとつ。茶道は、茶道部という仲間をくれた。私は高校1年生の時から、フランスへ1年間



留学に行くことが決まっていた。そのため、留学先で日本文化を紹介できるようになろうと思い、茶道部に入部した。ただ茶道を習おうと思って入った茶道部だったが、茶道部の友人は日々のお稽古や文化祭を通し、いつしか仲間になった。毎週金曜日、挨拶をする、お点前をする、先生に指導していただく、先輩に褒められる、後輩に教える。仲間とひとつの事を学ぶのがこんなに楽しいことだとは知らなかった。今では、茶道部は私にとって、そしてみんなにとってもかけがえのない居場所となっている。私はとても嬉しい。

ふたつ。茶道のおかげで出会えた人たちがいる。友人の高校の文化祭に行った時、その高校の茶道部のお茶会に参加した。違う高校の知らない子だったけれど、普段私と同じようなお稽古をしているのかな、と思うとなんだかみんな仲間のような気がしてきた。お点前がんばれ、お運びがんばれ、と自然と応援してしまい心が温かくなった。また、つい最近あった合同茶会では、他の高校の茶道部と一緒に準備をしたりお茶を点てたりした。最初はみんな緊張していたが、同じお客様のことを思ってお茶を点てていると、徐々に気持ちがひとつになれた。最後はみんな仲間になったような気がした。

茶道を通して、人と繋がれるのはなぜだろう。数多くある理由のなかで私が思う一番の理由は「思い遣る心」だ。茶道には、沢山の決まりや順序がある。それを難しいと最初は思ってしまいがちだが、実は全て「お客様のため」だ。これは茶道を少しずつ少しずつ習う上で、身に染みて理解できた。例えば、一度茶会に小さな子が来たことがあった。その時、みんなは「お茶が苦いかもしれないから抹茶を減らそう。先に点てて、少し冷ましてから出そう」と工夫していた。茶道には正解がない。点てる人それぞれの「思い遣る心」で、そのときどきのお客様に合わせたおもてなしをする。日本人が昔から大切にしてきた心。これが、人と人を繋ぐ。これが、私と部員、先生、その他多くの人とを繋いだ。

茶道で学んだ「思い遣る心」。フランスでも私と誰かの心を繋げてくれるだろうか。実は日本文化を紹介する場があると聞いているので、そこで茶道を現地の高校生に披露したいと思っている。茶道の、日本の、「思い遣る心」を海の向こうまで届けてきます。

第一席

まあるく生きる

賢明女子学院中学校3年（兵庫県）

阿部 花音

茶道の中には「まるい」が多い、お茶碗、お棗、蓋置。お点前の動きにもかくかくとしたものは少ない。なめらかで繊細な所作ばかりだ。それではなぜ、茶道の所作には「まるい」が多いのだろうか。

茶道の基本精神が「和敬清寂」であるように、茶道はお茶席に来ている人とのつながりや調和を大切にしている。お点前をする人、後見をする人、お水屋にいる人、お運びをする人、そしてお客の全員で一つのお茶席をつくり上げることが重要だ。どれか一つの要素が抜けてしまっ



ではお茶席は成り立たない。そのようなことから、私は茶道とは自分自身の中で対話するものでありつつ、人とのかわりを大切にすると感じた。したがって、かくかくとした動きはその意図にあうものではない。誰かをもてなしたい、よいお茶席にしたい、自分自身を磨きたいという思いがなめらかな所作に表れていると感じる。確かに学校でお稽古をしているとき、茶せんでお茶を点てているときに限らずお棗を清めているとき、お茶碗を茶巾で拭くとき、一つ一つの動作を通して心もおだやかになっている気がする。

茶道をはじめて今年で2年になるのだが、「茶道とは何か」と考えたことはほとんどない。だが、茶道をはじめてから確実に自分の中の何かが変わった。そのうちの一つは、人と「まるく」かわろうと思うようになったことだ。もともと自分は気に入らないとすぐにきんきん吠えるような人だった。要するに角がたっている性格だ。しかし茶道のお稽古をするうちに、ゆっくり落ち着いてなめらかな所作で動くことや誰かをおもってお茶を点てることを学んだ。私にとって茶道は角ばった心をやさしく包みこんでくれるものだ。「茶道とは」という神髄にはまだまだたどり着いていない。だが、私なりの茶道を見つけたいと思った。

第一席

開いた世界

姫路市立神南中学校2年（兵庫県）

苗村 かの

私は中学校に入って、初めて茶道を始めました。それまでは、地域で行われるお茶席に連れて行ってもらったくらいで、全く経験もありませんでした。

初めてのお茶席は、最初から最後まで分からないことだらけでとても緊張したけれど、茶道というものに強い憧れを感じ、将来私も必ず茶道をやろうと決めるのに十分なインパクトがありました。

お茶室に入った瞬間、空気が変わった気がしました。ピンと張り詰めたような、緊張感のある空気感が、自然と私の背筋をシャッキリとさせました。それは今までに感じたことのない、心地よい緊張感でした。

お点前を披露される方の無駄のない美しい所作にも目を奪われました。その時は、お作法など何も知らなかったけれど、純粹に引き込まれる美しさがありました。緊張しながら見様見真似でいただいたお茶の味は、正直あまり覚えていないけれど、初めての非日常的な体験に、その日一日気分が高揚していました。

茶道を初めて1年目は、初めてのお茶席でのイメージの「茶道は美しい」が強くて、「美しいお点前を披露しなければ」という考えにずっと縛られていました。緊張も相まって、お点前を楽しむ気持ちや何よりも「美味しいと思ってもらえる一服を点てること」を、すっかり忘れてしまっていました。

少しずつ茶道部の活動にも慣れ、自分のお点前にも少しだけ自信が持てるようになってきた



頃、同級生の祖母がお茶碗を茶道部に寄贈してくださいました。それまでは練習用のお茶碗を使ってお点前をしていたので、新しいお茶碗をいただいたことに、とても心が躍りました。嬉しい気持ちを抑えて、ゆっくりと箱を開けると、真っ黒なきれいなお茶碗が目に入りました。控えめな艶がとても美しいお茶碗でした。

その日のお稽古は、そのお茶碗を使ってお点前をしました。お茶碗の艶やかな黒が、お抹茶の深い緑の色を美しく映えさせていました。そして見た目だけではなく、お抹茶の点てやすさに驚きました。茶筌を通じて私の手に伝わってくる、しっかりとお抹茶を点てられている手応えを感じました。使うお茶碗によってこんなに受ける印象が違うんだと初めて知った瞬間でした。

その日からお茶碗以外のお道具にもどんどん興味が湧いてきました。お茶碗や茶杓、棗の作者やそれにまつわる物語について勉強することにも楽しみを感じています。

私の知っている茶道の楽しみ方はまだまだ茶道の入り口です。そして、それはまだまだたくさんの私の知らない茶道の世界が広がっていくということです。そう考えると、私の気持ちは知らず知らずわくわくしてくるのです。

第一席

茶を纏う蟬

兵庫県立龍野高等学校2年（兵庫県）

安井 千晴

盛夏の訪れを肌で感じながら、入部届を出した1年前を指先で思い出す。緊張していた私の心を温かく溶かしたのは、和室の優しい香りと柔らかい笑顔であった。今思えばそのときの安心感が入部のきっかけだったのかもしれない。穏やかになった気持ちが、先輩のお点前でさらに爽やかに清められる。「こんなに美味しいお茶はない」と思う今でも目指している到達点。素早い手首の動作はどうすれば身につけることができるのか不思議でたまらなかった。今でこそ先輩に少し近づくことができたその動作は、「慣れ」ではなく目の前の客への「おもてなし」の心であることを実感する。

茶道は人の心に残るのだろうか。思い出を振り返ったときその人の心を温かくするのだろうか。経験を忘れやすい傾向にある私はそんなふうに1年生の間しばしば考えていた。

2年生になった5月。台湾にある姉妹校の女子高校が来日し、校内で交流をしたときのこと。10名の生徒が茶道部に見学に来られ、部員一同心を込めておもてなしのお茶会を開いた。流暢な英語を話す彼女たちに、緊張しながら拙い英語で身振り手振りを交えて意思疎通を図ろうと奮励した。季節の和菓子に目を輝かせ、お茶を飲んで目を細めながら「オイシイ」と言ってくれた彼女たち。お茶会のあとは日本の歌手の話題で盛り上がった。春の日向のような笑顔に癒され、お別れの時間が寂しく感じられた。茶道が私たちを繋げ、新たなご縁をいただいたことに深く感じ入った。地域や言語が違ってても茶道は人を笑顔にし、人の心を温かく豊かにすると身をもって知ることができた。



茶道は私の心に語りかけるようにお茶の香りを脳裏にも染み込ませる。祖父母の家を訪れたとき、床の間が茶道の茶の字を連想させ茶筌を握る右手を寂しくさせる。まるで茶道をすることが私の使命であるかのように。その道を迷わず歩めと言うように。

教わる度に思う。「幸せな時間がいつまでも続くように」と。お茶を点てる度に思う。

「美味しく、美味しくなりますように」と。

今日も茶道室へ向かう。薄桃色の稽古着を身に着ける。床の間で凜としたむくげに涼風が優しくささやく。

第一席

あの日不登校だった僕が見た茶道は

福岡県立嘉穂高等学校2年（福岡県）

末武 快斗

僕は高校2年生の春に茶道部に入部した。そんな僕と茶道の部活の話をきいてほしい。

僕は茶道部に入部するまでは学校に行くことがなんとなく嫌いで、充実した学校生活を送ることができていなかった。そのとき、よく相談に乗ってくれていたわが校の養護教諭であり茶道部の顧問である先生が、僕に茶道部への入部を勧めてくれた。しかし、僕は中学生のとき部活の先輩がとても嫌いで部活動が嫌いだったために、高校では部活には入らないつもりでいた。それに茶道部ときくと、堅苦しく厳しいイメージがあり、そんな部活の先輩たちはさぞ恐ろしいだろうと今思えば失礼なことを想像していた。そんな僕の様子を見てなのか先生から「とりあえず見学だけでも行ってみたらどうですか。何か感じるものがあるかもですよ」という提案を受け、うしろめたい気持ちもありながら次の日に見学に行くことにした。

一日の授業が終わって放課後、茶道部の部活が行われている和室の扉の前に初めて立った。上履きを脱いでふすまをあけたとき、いい香りがした気がして僕はどこか懐かしい気持ちを覚えた。立ち尽くす僕を見た茶道部の先輩方はやさしく部屋の中に招き入れてくれた。先輩方は初めましてであるはずの僕に優しく親しく接してくれた。お稽古が始まると、まず見入ったのは先輩方の所作だ。華やかだと僕は時間を忘れて見とれていた。先輩が「せっかくだしお茶、飲んでいって」と言って、お茶の準備を始めた。静かな和室に響き渡るお茶を点てる音、先輩の凜々しい顔つき、それらを含むこの場すべてのことがとてもいとおしかった。僕はこの日、人生で初めて茶道を感じ、茶道の魅力に心を惹かれることになった。それから僕はその日のうちに入部届けを書いて帰宅した。

僕が入部して間もないころ、文化祭準備が始まった。茶道部の文化祭はお茶会と全校生徒の前にでて行うパフォーマンスがある。先輩方はパフォーマンスに磨きをかけるために毎日遅くまで必死に稽古をしていた。そんな先輩方の姿を見て、僕はこのときはじめて文化部の部活動の良さがわかったような気がした。これまでの僕は部活動なんて運動部以外ありえないし、文化部がどんな気持ちやモチベーションで部活動をしているのかまったくわからなかった。しか



し先輩方を見ていると茶道をみんなに知ってほしい、私たちの茶道をみんなに届けたいという思いを素人ながら感じ取った。そんな先輩方のサポートをしながら文化祭当日を迎えた。

当日、茶道部の楽屋で見た先輩方はとても美しかった。普段の制服の姿ではなく着物姿である先輩方は、美しさや上品さにより磨きがかかっていた。僕はそんな先輩方に強い憧れを抱いた。全校生徒の前でのパフォーマンスの直前、先輩方はとても緊張しているようにみえた。しかし先輩方がステージに立つと、凜々しい顔つきと緊張を全く感じさせない所作でパフォーマンスをやり遂げた。次のお茶会ではお客さんの顔や表情を見ることができた。先輩の点てたお茶を飲んだお客さんはみんな笑顔になっていた。茶道は人をこんなにも笑顔にできることを知った。

今はもう先輩方はいない。先輩方がいたあの日の茶道をみることはもう二度とできないのだろう。しかし僕はそんな一期一会な茶道がとても好きになった。茶道は僕と先輩方を結んでくれた。あの日の失敗が、あの日の時間が戻ることはもうない。しかし僕には茶道を通じて出会ったいろいろなものがある。大切な先輩やあの日思ったこと、そのすべてがこれからの僕にとっての大きな支えとなる。不登校という忘れたくない過去もあるが、忘れたくない過去や思い出もできた。今の僕は茶道や部活、そして先輩方のおかげで前を向くことが出来る。来年の僕はきっと先輩方のように輝いている、そんな姿を夢見て僕は今日も稽古に励みます。

第一席

力を合わせる大切さ

飯塚市立飯塚第一中学校2年（福岡県）

小堺 八愛

私は、中学1年生のとき、初めて茶道に出会った。興味本位で行って見た茶道部の仮入部で、初めて人の動きがきれいだと思った。茶道の決まりを一つも知らずに仮入部に行ってしまったので、手取り足取り教えてもらった。先輩方から礼のお手本を見せてもらったが、どの動作も茶道初心者の私にはキラキラして見えた。このとき感じた茶道部への憧れを今でも覚えている。

私が茶道部に入って2年目の今年、茶道部には3年生がいない。私たち2年生だけで、茶道部に入部してくれた1年生8人を支えなければならない。今までずっと頼ってきた先輩たちは卒業してしまった。不安の中、部長である私を、茶道部員が支えてくれた。茶道部の2年生には、個性的な人が多い。抹茶が苦手なのに入部している人、ずっと絵を描いているのに美術部ではなく茶道部にいる人、1年の途中から入部しているのに一番部活でくつろいでいる人など、他にも個性派ぞろいだ。そのため、いつも2年生は明るく元気に活動している。しかし、2年生だけでゆっくり過ごしているわけにはいかなかった。4月から1年生が入部してきたからだ。3日間の仮入部での猛アピールのかいがあって、8人も入部してくれた。

1年生が入部したのは良いものの、狭い作法室に計15人の茶道部で、どのように部活動をしていくのか悩んだ。1年生のまとめ方もわからなかった。そのため、1年生の初めての部活動はうまく進めることができなかった。



状況を改善しようと2年生みんなで相談し、机の位置や座る位置を事前に考えたり、今年の3年生のやり方を思い出したりして取り組むと、最初の部活動よりもスムーズに進めることができた。私は茶道部を通して、力を合わせて取り組む大切さを学んだ。

2年生が力を合わせるからこそできることがあって、今の茶道部15人でやるべきことがたくさんある。これからもたくさん悩むことがあるかもしれないが、そんなときこそ、茶道部みんなで頑張ろうと思う。私も先輩方のように、後輩の支えになるような人になりたい。



令和6年度 第45回 学校茶道エッセイ集

令和7年2月 発行

発行 一般社団法人 茶道裏千家淡交会総本部

〒602-0073 京都市上京区堀川通寺之内上る
寺之内堅町682番地

電 話 (075) 451-5166

F A X (075) 451-3926

<https://www.urasenke.or.jp>



一盃からピースフルネスを
茶の湯に会う、日本に会う